

マブラヴオルタネイティヴ二次創作小説 熱砂の刃

賀川 シン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

マブラヴオルタ本編では殆ど描かれる事がなかったアフリカ戦線。

BETAハイヴ目標H9・アンバールハイヴとの距離が近く、激戦区となっているスエズ運河絶対防衛線。ここで戦う各軍の兵士の心情や状況、スエズ近辺で暮らす人々などそこで織りなす人々などの事を描いた作品となっています。

2001年、BETA戦線での最前線での攻防戦など、そして最後に待つのは全人類の存亡をかけた作戦での第一フェイズの戦いまでが描かれます。(予定)

※ マブラヴオルタの設定に自分なりの解釈と設定を追加しており、オリジナル設定に語弊がありますので、大らかな心でお読みくだされば幸いです。

目次

プロローグ	1
砂漠を駆ける斬撃 ①	3
砂漠を駆ける斬撃 ②	7
砂漠を駆ける斬撃 ③	13
砂漠を駆ける斬撃 ④	19
砂漠を駆ける斬撃 ⑤	31
大地を切り裂く鎌鼬 ①	34
大地を切り裂く鎌鼬 ②	39
大地を切り裂く鎌鼬 ③	46
赤塵の旋風 ①	51
赤塵の旋風 ②	54
赤塵の旋風 ③	58
赤塵の旋風 ④	63
心の隙間を風ぐ、その風は ①	73
心の隙間を風ぐ、その風は ②	80
心の隙間を風ぐ、その風は ③	83
心の隙間を風ぐ、その風は ④	89
心の隙間を風ぐ、その風は ⑤	95
心の隙間を風ぐ、その風は ⑥	100

プロローグ

西暦1970年代、地球人は宇宙から来た謎の生命体、通称『BETA』と呼称された生命体との戦争状態となっていた。状況は劣勢のまま、人類は地球上から駆逐されていった。

30年たった2000年現在、BETAが最初に降下した中国・新疆ウイグル自治区・喀什（カシユガル）を皮切りにユーラシア大陸をほぼ制圧、その間に人類は人口の7割以上が犠牲となった。

ユーラシア大陸とほぼ陸続きであるアフリカ、その窓口にあるスエズ運河は様々な物流や軍の物資運輸に使われている重要拠点であり、この要衝を守るために国連軍、アフリカ連合軍、中東連合軍、そして祖国を追われ、アフリカ北部に政府租借地を借りている欧州連合軍が一丸となりBETAの進行を防いでいた。

現在、対BETA戦において活躍するのは戦車などの砲撃による長距離砲撃や面制圧だが、その中で新しい兵器が生まれ、その兵器の存在が今現在の対BETA戦のと要となっている。

戦術歩行戦闘機。通称、戦術機と呼ばれる二足歩行型の戦闘兵器である。1970年代後半に戦線に投入されて以来m人類の雄々しき刃として活躍している。初の戦術機と呼ばれている米国開発のF-4（ファントム）は全世界で普及された戦術機であり、それを皮切りに各国で改良され、進化、発展していった戦術機は各戦線の特徴をもって運用されていた。

地球上の1G重力化でも自由な三次元機動を可能とし、対BETAに対して唯一、のでの遠距離・近距離において単一兵器として有効打撃を可能とした戦術機の登場によって人類は30年という月日を堪えてきた。

だが、30年もたった今も、戦況は覆ることはなく、劣勢が続いていた。

人類側はBETAの進行をユーラシア大陸に抑え込んでいるものの、BETAの前線基地であるハイヴと呼ばれる攻め落とす事がほぼ出来ていないのが現状である。

そして、人類に残された猶予はそこまで余裕もなく、世界中に絶望という二文字の空気が包み込んでいる事実は今現在も変わる事はないのであった。

そんな中、アフリカ大陸へ派遣される一つの戦術機中隊が向かっていった。それはアフリカ・中東から遙か遠くにある島国、日本帝国軍から特殊任務の為に内密に派遣された『わけあり』中隊である。

日本帝国軍、第604戦術機中隊・通称「ライノ中隊」

この物語はライノ中隊が遠きアフリカ大陸での戦闘記録となる。

2001年、上旬。ライノ中隊の歴史には残らない戦いの歴史の幕が開くのであった。

砂漠を駆ける斬撃 ①

遙か頭上に散々と輝く太陽の熱気を帯びた砂原はまるで生物が生きる事を拒むようであり、そのような場所で一つの中隊が30分ほどの間、待機命令を出されていた。

ここはアフリカ北東部のスエズ絶対防衛線から東に出て、旧イスラエル・ヨルダン地区付近。

そこには人が住んでいた形跡は残されておらず、数えるのが馬鹿馬鹿しいぐらいのBETAとの戦闘によって荒廃した大地となっている。

外気温が軽く40℃を超えており、歩兵や戦車乗りであれば、嫌気の差すほどの任務であるが——幸い、彼らの乗っている機体は空調完備されており、着ている強化装備には様々な環境からもその身を守る機能が備わっており、別に何かしなければ特に問題はない。

戦術歩行戦闘機、対BETA兵器として人類が新たに開発した兵器に乗る彼らは衛士と呼ばれている。

ただ、彼らは少し訳ありであった。彼らはこのアフリカ・中東戦線から遙か彼方の島国、日本から特別に派遣された戦術機部隊であるからだ。

自国にBETAのハイヴを持つ日本が他国に戦力を出す余力はなく、本来であるなら彼らも日本を防衛戦力として投入されたに違いない。

政治的に極秘裏で派遣されてひと月ほどが過ぎ、慣れない砂漠戦や環境の変化、戦術の違いなどに彼ら衛士も戦術機を整備する整備士たち、その他にバックアップのスタッフ達も徐々に慣れと余裕が出来つつあった。

ここ最近の戦術機コンディションは日本に居た時と誤差はないぐ

らしいに順調であった。

彼ら、日本帝国軍特別中東派遣部隊、第604戦術機中隊。通称ライノ中隊は今回の作戦を指揮する中東連合軍のHQ（ヘッドクォーター・司令部）からの待機命令の解除を密かに待っている所であった。

機内の電力消費を抑えるために薄暗い戦術機の管制ユニットの中でぼんやりとした瞳で戦術マップを見つめる一人の衛士の姿があった。

彼女は退屈そうな表情で溜息をついた。この先では今でも突出してきた小規模のBETA集団との戦闘が続いており、本来ならライノ中隊も参加する予定ではあったが、いざ作戦地域に来たものの、HQから伝えられたのは戦場から離れたこの場所での待機命令であった。

スエズ防衛線にBETAを進行させないことも大切ではあるが、このままだと自分達が来た意味が無いんじゃないかと思ってしまう。

癖になりそうな溜息を抑えながらしていると彼女のパートナーともいえる衛士から個人通信が入る。

衛士の着る強化装備には対G機能や対衝撃機能、生命維持装置などの機能が備わっており、その中でも頭部に付けるヘッドセットには網膜投影装置が戦術機のカメラやセンサーなど各種コンディションのデータが表示されている。

なので衛士の乗る管制ユニットにはモニターの類は搭載されていないのだ。

そして表示されたのはライノ中隊で唯一の同い年であり、同郷の出身、幼いころからの友達であったライノ6であった。

「少しは集中しておいた方がいいんじゃない？　いつ突撃命令が下るか判らないんだし」

そう言っただけでライノ6は戦術マップを確認しながら。

「まあ、戦術マップを見る限りじゃ、こちら側が優勢だけどね」

「でも奴らに優勢とかつて、あまり意味がないんじゃない？ 気を抜いて殺せる奴らじゃないし」

ライノ7の言葉にライノ6はニコツと笑みを浮かべる。彼女の昔から変わらない笑みにライノ7も頷いて応える。

今のご時世、昔からの友人と生きていられるだけでも幸せな部類かもしれない。作戦中ではあるが彼女たちにとっては今の状況は気軽に会話が出来るほどの余裕があったのだ。

すると、ライノ7、ライノ6に通信が入った。

画面が開くとそこには眉を顰めた女性が映る。彼女はライノ中隊の副官であり、ライノ7、ライノ6に視線を向けると。

「ライノ2より呑気に会話しているお二人さん。いくら待機中とはいえ任務には交わしませんよー……気は抜かない。いい？」

「了解」

上官の命令に即座に応答し、答える。

「それじゃあ、ライノ7また後でね」

「うん、また後で」

そう言ってライノ6との通信を切った後、不意にライノ7は気付く。先ほどまで戦場へと援護砲撃を行っていた砲兵部隊から砲撃支援が無くなっていたのだ。

しかしまだ前方では戦いが続いており、砲撃支援が必要であった。その疑問に答えるかの如くライノ中隊全機に通信が入る。

「全機、傾注。ライノ1よりオールライノ、先ほどHQから通信が入った。まあ、察しのいい奴なら気づいているとは思いますが、先ほどから支援砲撃を行っていた砲兵部隊の周辺にBETAの奴らが地中進行によって出現したらしい。すぐさま砲兵部隊は撤退を開始、付近で待機していた戦車小隊が撤退支援を開始した」

そこで一呼吸の後にライノ1が中隊全機に号令を告げる。

「各機、これより待機命令を解除！ これよりライノ中隊は撤退中の砲兵部隊の撤退支援を行う！」

その瞬間を待っていたかのように待機していたUN（国連）カラーに彩られた日本帝国製の第3世代戦術機、不知火の跳躍ユニットに火が入る。

一斉反転の後に撤退中の友軍へ向けて低空飛行で飛び出したのだった。

わずかに残る丘陵地帯と乾いた大地が高速で流れていき、14機の戦術機は低空での飛行を行いながら陣形を素早く組んでいく。

通称、楔壺型（アローヘッドワン）と呼ばれる戦術機部隊が行う一般的な突撃型陣形であり、弓の矢尻のような陣形である。

そして、地表を高速で移動するライノ中隊が撤退を行う砲兵部隊をリーダーに捉えたのは命令が下されて約5分後の事であった。

砂漠を駆ける斬撃 ②

これまでBETAの進軍方法は分かって二つのみである。

一つ目はハイヴから無数湧きだし、膨大な物量によつて大地を進撃して突撃する方法。

二つ目は地中に巨大なトンネルを掘り、そこから進行する方法である。

これらを察知する方法としては軌道上からの軍事衛星による望遠カメラによる映像解析や地表に敷設する振動センサーなどによつて大体の進行方向を割り出す事が出来るのだが、今回は運が悪かったのか、後に判明した事だが、作戦前日に戦域で起きた砂嵐のお蔭でセンサーの一部が破損してしまったのだ。

さらに砲撃による振動や支援による有効打を与えていた事による兵の慢心もあり、状況判断が遅れた事も原因の一つであった。

砲兵部隊は突如として現れたBETAの群れに驚きを隠せずに混乱していた。

トンネル出現口から這い上がる大量の戦車（タンク）級に得物を見るや否や全速力で捉えようとする。その中で唯一、冷静な対処を行っていたのは護衛にしていた戦車小隊であった。

「全部隊の撤収を急がせろっ！ ぐずぐずしていると全員戦車級に食い殺されるぞっ!!」

怒声でインカムに告げる戦車小隊の小隊長、彼らを含む戦車小隊の隊員は長らくも欧州戦線で戦ってきた兵士たちであった。

その為、現状においても少々の動揺だけで済んでいるのだ。

だが、戦車小隊以外の今回の砲兵部隊はアフリカ連合軍から送られた後方部隊であり、実戦を経験したことのない兵士が多くいた。

マニュアル通りの事しかまだ出来ない新兵同然ともいえる者たちの周囲に突如としてBETAが迫るとしたら、そこにはパニックが心

を支配する。

後方の自分たちの周囲にBETAが突然現れると思ってもみなかった砲兵部隊の大多数が足元をすくわれている。

その間にも戦車小隊が現れたBETAに対し、砲撃を開始していた。

「ちくしょっ！ 装備なんか捨てていけっ！ とつとと全員トラックに乗り込むんだよ!! 責任っ!? なんもん、生き残った後に考えればいいんだよっ！ だからとつと走れっ!!!」

砲兵部隊を指揮していた指揮官が叫び、輸送用のトラックに誘導している。その間にも戦車級が動き回る資源（人間）を狙う。

その様子を確認していた戦車小隊の小隊長が無線で他2両の戦車に命令を下す。すでに肉眼で確認できるほどにBETAが迫っているのだ。

「よし、第一射……撃てー!」

狙いを先頭集団に付けて砲撃を開始する戦車小隊、彼らの乗る欧州連合軍製のレオパルド2の主砲、120mm滑空砲が戦車級の先頭個体を複数纏めて吹き飛ばす。

圧倒的な砲撃力は戦車を持っている。だが、圧倒的な物量を持つBETAに対してたった3両の戦車では手数が足りず、すでに200匹以上のBETAが戦車の砲撃に怖気つかずに突撃してくる。

「小隊長っ、このままだと奴らに押し切られるっ！ 至急に距離を取らなければ!!」

砲弾装填の自動化が行われており、わずか3人で乗る戦車の中、自分たちにも目掛けて突撃してくるBETAに姿に操縦士が思わず告げる。

だが、その言葉は小隊長に一蹴されてしまう。

「無駄だ。今から距離を取ろうにも前方の戦車級は時速80キロで向かってくるんだっ。今から後退してももう遅い!」

あくまで冷静に自分たちが置かれている状況を部下に伝えると操

縦士の顔が一瞬だけ悲痛な表情を浮かべるが、現実に戻り、込み上げてくる思いを堪え、思わず愚痴る。

「くそっ、この辺りの坑道は全部埋めたんじゃねーのかよっ！ ふざけやがって!!」

操縦士はこの隊にきて半年ほどしか経っていないこの小隊唯一の新兵であり、腕はいいがまだ戦場の理不尽さについての考えは甘かった。

「こちら、3号車！ クソ野郎どもが迫ってきているがどうする——
——このまま先頭集団に火力集中を行うのか!？」

声に焦りを含む言葉に小隊長は告げる。

「もう少しだけ堪えてくれ。先ほど救援要請をだした——そちらの撤退準備は終わっているのか!？」

切羽詰まる状況の中、確実に命令をこなす部下たちに申し訳なさを感じつつ、インカムにて砲兵部隊の指揮官に状況確認の通信を行う。

「今、終わった！ くっ……すまない……!!」

ちようど、収容が終わったのだろうか、兵員輸送用のトラックが走り出していた。

装備品と幾人かの欠員を出したものの、人員を満載したトラックは従来のスピードが出せず、舗装もされていない荒地を進んでいく。

その姿を確認したあと、戦車部隊長は部下に対して非情な命令を下さなくてはならなかった。

現在、撤退中であるトラックは荷物である人員を超過して乗せている為に思う様に速度が出ず、このままでは基地に戻る前に戦車級に追い付かれてしまう危険性があるのだ。

そして現在、BETAを足止め出来る戦力はたった3両の戦車のみ、9名の戦車乗りと数十人の砲兵部隊員、どちらかを天秤に掛けなくてはいけないのだ。しかも、悩む時間はもうない。1分でも数秒でも貴重な時間なのだ。

その一瞬の刹那、戦車小隊長は命令を下す。

「よしっ！ お前らが待ちに待った後退の時間だ!……といたい

が、後退しているトラックは速度が出せない状況だ。我々はトラックとBETAの間に割って入り、後退の援護を行う！ あのクソ野郎どもにありったけの砲弾をぶち込んでやれっ!! いいな！ 無事に帰った気絶するまで飲み明かすぞっ!! わかったかっ!!」

「了解っ!!」

絶望的な状況化、今告げた言葉に応と答える部下たちに小隊長は触れ出る感情をギュツと押し込んで小隊全員の生還を果たすべく指揮を執った。

だが、現実非情であり。真実でもあった。

戦車小隊の奮闘虚しく、敵との推定距離が残り2キロを切る。いつ捕捉されても分からない。しかも残りの砲弾も尽きかけていた。

内心、戦車小隊全員が己の死を悟った瞬間、一匹の戦車級が小隊長の乗るレオパルド2に迫り、砲弾の装填が間に合わない判断した小隊長は身体が先に反応していた。

戦車の上部ハッチを開き、取り付けられた機銃に手を伸ばす。

「隊長っ!!」

「戦車兵なめんじゃねーぞおおおー!!」

間に合うかはわからない。機銃の安全装置を外し、コックを下げる——距離として50mを切り、戦車級の巨体が飛び掛かる形でその陰を落としていた。その光景を目の前にしても、小隊長の瞳は最後まで諦める事なく、その眼光は戦車級を捉えて、機銃のトリガーを引こうとした瞬間。

BATEが空を舞ったのだった。否、正しくは空に碎け散ったのだった。

碎け散った戦車級の赤い血しぶきが降りかかり小隊長は思わず腕で視界を覆う。真っ赤に染まる視界の中、轟音と共に前方に迫るBETA群に対して一斉の機銃掃射が行われる。

あまりの銃撃音と爆風などでヘルメット越しに耳を塞ぐと共に、視界が開き次の瞬間に映った光景は死に絶える戦車級の残骸と砂埃を

上げて荒地に着地する巨人の姿だった。

と、同時に各車に備わっている通信機器より声が聞こえてきた。

「こちらは国連軍所属、日本帝国派遣部隊。第604戦術機中隊、ライノ中隊だ！ 撤退要請支援の為に参上した！ これより貴隊の撤退を支援するっ！」

「に、日本帝国!?!…了解した。では、こちらからも支援砲撃で援護する」

車内に戻り、インカムと通信機器に視線を向ける小隊長は内心、援護要請から5分ほどで戦術機部隊を寄越した上層部の素直さに驚いていた。

今もBETAが現れた地下坑道からは小型種が溢れかえっており、その個体数は数百規模となっていた。

その状況を見てライノ1が戦車小隊に向けて進言する。

「現状、このままだとBETAとの近接戦闘になる。その場合、支援砲撃はこちらの動きを阻害する可能性がある。我々としてもこれ以上のリスクは負いたくない」

そう告げると小隊長はその言葉に込められた意味を察知すると、すぐさま小隊に通達する。

「——了解した。貴殿らの援護に感謝する！ 各車、とつとと撤退するぞ！ 遅れるなっ!!」

「え、あ、はいっ！ 了解!!」

小隊長の援護という言葉に準備していた操縦士は思わず撤退という言葉に反応が遅れていたが、身体が自然と命令通りに車体を後退させていた。

その言葉に砲手についていた兵士が言葉を上げる。

「あいつら、俺らが誤射する奴らだと思われたんですかね!!」

その台詞に小隊長は「そうじゃない」と一言告げて、砲手にくぎを刺す。

「あの戦術機部隊の装備をしてみる。背中にマウントされているのは

近接戦闘用の長刀だ。こんな世の中でBETAとの近接格闘戦をするような奴らだ。そんな奴らにとっては砲撃は邪魔になる。つまりは遠まわしに俺らに何も負い目を感じずに撤退してくれと、言っているようなもんだ」

「へえ、よくわかりましたね。流石うちの大隊長だ」

砲手もその言葉に納得したのか、僅かに笑みを浮かべ、その様子に小隊長は「半分、感みたいなものだ」と思わず呟いた。

砂漠を駆ける斬撃 ③

ライノ中隊が救援に駆けつけて地上にいるBETAに対し牽制射撃を行いながら、着地する。

後方では戦車小隊の車両が少し戸惑いながらも後退を開始していた。その様子を聞いていたライノ2は戦車小隊との通信を終えたライノ1に戦況を通達する。

伝えると言っても中隊内で共有している戦術マップのデータは常に最新の状況に更新されているが、個人の状況把握の為に口頭での回答を常としてきた。そして、この二人の通信も中隊全体に聞こえている。

「現在、前方のBETA推定個体数は約900。ライノ1、攻撃隊形を鎚型（ハンマーヘッドワン）に変更し、ここで迎え撃つのがベストと思われます。どうしますか？」

「確認した。では前衛にライノ5、ライノ6、ライノ7、ライノ8。で敵を蹴散らしていく。今も湧き出している坑道入口まで一気に押し返すぞっ！ 他の機体は前衛の支援、散らばった奴の後始末をするっ！」

命令が下された瞬間、各機がポジションを変えていく。

「各機、センサー感度には留意するように、地中からの再侵攻にも注意せよ」

ライノ1の命令に続けて、諸注意としてライノ2が中隊各機に促す。

「了解っ!!」

各機から応答の声が届き、指示があつた機体が前に出る。各々の機体自分が得意とする得物を握り、突撃準備が整う。その様子を確認するとライノ1は一呼吸を終えて、ライノ中隊全機に告げた。

「これより正面BETA群に対して近接機動戦を開始する！ 少数だが全機、油断するなよっ！——全機、突撃開始っ!!」

前衛機の跳躍ユニットが青白く光ると同時にライノ中隊本格的に

BETAとの戦闘を開始した。

今回相手にするBETA群の大半が戦車級であり、大型種に分類する要撃級はそこまで多くはない。なので冷静な対処で攻撃していけば問題はないだろう。

戦術機の突撃砲、36mm機関砲のマガジンに装填されている弾数は2000発ほど、今回は数百程度の規模であるが、これが大規模な防衛線になればBETAの数は数万以上を相手にしなくてはならない。

そうなれば、2000発の弾数はあつという間に底をついてしまうだろう。もちろん予備弾倉も装備されているが、突撃を行う際はマガジン交換する隙はなく、いざとなれば腕部装甲内に装備されている短刀を使う事もある。

だが、BETAとの近接格闘戦は一瞬の油断が命取りとなり、その対処や状況判断の遅れは、戦車級に取り付かれて機体ごと食い殺されてしまうのだ。

そういったリスクの方が高い為に現在では近接戦闘は推奨されていない。短刀ですら取り付いたBETAを振り払う為に使われるのが大半だった。

しかし一部の衛士の中には敢えてBETAとの近接格闘戦を行う者もいた。

「あれはライノ6に任せてあるから……って一人だけ突出しすぎよっ!! ライノ7っ! もつと連携する事を考えなさいっ!!」

同じように前衛ポジションのライノ8が堪らず言ってしまう。その視線の先には我先にBETA群に突入する不知火の姿があった。

跳躍ユニットを巧みに扱い地表を掠めるように噴射地表面滑走(サーフェイシング)を行いながら、すれ違いままに戦車級を一刀両断し、要撃級は脚部を切り裂き、動きを止めると後続の機体が突撃砲で仕留めていく。

部隊の中でもいの一番に突撃していくライノ7の操る不知火は両

手に74式近接戦闘長刀を持っており、突撃砲は背中の可動兵装担架システムに装備されており目立つ戦闘スタイルで交戦していた。

しかし、いくらなんでも向かってくる全ての数を捌き斬る事は出来ないが、前衛が命がけて切り開いた戦域の穴を中衛及び後衛の援護射撃によってBETAを次々と撃ち殺していく。

味方の射撃で接近中だった要撃級が死に絶え、ライノ7が死骸を回避した瞬間、死骸に紛れて戦車級が3体飛び出して襲い掛かる。

その行動にライノ7も即座に反応して、長刀を振りかざそうとした瞬間、戦車級が空中で肉片となって飛び散った。ライノ7の後方にいたライノ6が両手に持った突撃砲で対処、相方の的確なフォローに礼を述べる。

「ありがと、ライノ6」

と、短めな返事を返す。

「いつもの事でしょう別に気にしないでよ。綾音ちゃんは……つてごめん、今は任務中だった」

昔からの親友なので一瞬の気の緩みにて名前で呼んでしまうと、ライノ7は口元に少しの笑みを浮かべるとそつと言葉を口にした。

「ううん、別にいいよ。千里ちゃん」

その声色は戦闘中のものであったが、優しい口調にライノ6は思わず口元に笑みを浮かべてしまうのであった。

ライノ中隊到着後、BETA群の進行速度が加速度的に弱まり、戦域マップからBETAの数を表す赤点が消えた事を確認し、ライノ1はデータリンクにて中隊各機に通信を行った。

「敵の数は残りわずかだが、坑道入口には十分に警戒を行え、奴らはどこにでも湧いてくるからな。ライノ各機、残弾報告——」

突撃砲のマガジン交換の為に二機一組で交互に交換し、ほんのわずかであるが気を休める時間が生まれる。その間に前衛にて警戒中であったライノ7とライノ6はBETAが現れていた出現口付近まで来るとそつと穴の奥を覗きこむように見ている。

振動センサーなどで追加のBETAは来ていない事を確認しているがその坑道は異質であり、不気味さは拭えない。

その入り口を見ているライノ7の様子に気になってライノ6が尋ねる。

「ねえ、一つ質問してもいい?」

「……ん? どうしたの?」

「いやあくもしかして、綾音ちゃんさ、この中に入ってみようとか思っていない?」

まだ警戒中とはいえ、敵影は無いのでフレンドリーな口調で問うライノ6、その質問にライノ7は自分の長い長髪が横に揺れるぐらいに傾けると。

「……だめ?」

「だめだめ」

「少しだけでも?」

何か引つかかるのか、ライノ7の様子にライノ6が何かあるのだろうと長年の付き合いで察して訊くことにした。

「何か、あるの?」

「確証はないんだけど、これ、見て……」

そう言うところライノ7がいつの間にか坑道内に振動センサーを張り付けており、そのデータと音源データを見せる。

「微妙、だけど……何か動いている形跡があるんだよね」

確かに僅かではあるがセンサーに反応があるのは確かなのだが、現在もBETAとの交戦している戦域がある為にその振動などを拾ってしまっている可能性も高いのでライノ6はとりあえずライノ1へ報告する事にした。

もし、何も準備なしでBETAの地下坑道に突入する事はあまりにも危険である。BETAの作る坑道ないは戦術機でも移動は可能ではあるが、高度は取ることも出来ず、回避行動は取り辛い。

しかも不意に作られている横穴に小型種がいることも多く、奇襲を仕掛けられる場合がある。

戦闘地域でこうした坑道を発見した際にするのは速やかに入り口を爆破して潰さなくてはならないのだが、今回はそれを行う砲兵部隊がすでに撤退している——しかもライノ中隊にはH Qより連絡が入り、他で交戦中の戦術機部隊への支援要請が通達されているのであった。

「ライノ1、どうやら他の部隊は芳しくない状況になっているようです。幸い、この坑道からはもうBETAの増援は無さそうですので、センサーを設置して向かうべきでしょうが……どうしますか？」

隊長補佐としての意見を述べるライノ2の言葉にライノ1の頭では思考が巡る。

正直に言えば、今すぐに潰す必要はないが、少なくともこの坑道はアンバールハイヴに繋がっているという可能性が高く、もし次に起こりうる大規模侵攻の際に使われる可能性が高いので先ほどH Qにはこの坑道の存在を報告して戦闘が終わったのちに工作部隊などで封鎖するようにと進言している。

そして現在、救援要請が掛かっているのは中東連合軍ではなく、遠征で来ているフリカ連合軍の戦術機部隊であり、戦線が中東よりもフリカ連合の方が発言力が強く、派遣部隊として間借りしているライノ中隊としては命令の拒否はよほどの理由がないかぎりは出来ないだろう。

変わりゆく戦局の中で中隊長としてライノ1は最善の答えを出さなくてはならない。先ほどライノ6から来た報告にも耳を通してライノ1は情報と自分が培ってきたBETAとの苦い経験を示唆して、命令を告げる。

「よし、ライノ各機に告ぐ。一戦を終えて疲れているのは分かるが、これより我々は味方戦術機部隊の救援へ向かう事になった。総数は不明であるが、我々なら殲滅できるはずだ。データリンクにポイントを表示させる——あと……」

戦域マップに次へ向かうポイントが更新され、ライノ中隊各機が低

空飛行で向かう中、ライノ1は最後に名指しで二人を指名し、別命令を下すのであった。

砂漠を駆ける斬撃 ④

ライノ中隊が戦っている戦場から後方、スエズ防衛線外延部にある第38補給基地では先ほどライノ中隊が救った砲兵部隊と戦車小隊が到着したばかりであった。未だ前線では交戦中とはいえ、距離がある為に現在では第二種警戒態勢が発令されていたが、基地内の空気は何処か気に抜けた雰囲気か漂っていた。

後方の、更に言えばスエズ防衛線が近くにある事からの気の緩みがあるのだろう。

前線から命がけで逃げ帰ってきた砲兵部隊と戦車小隊はその基地内の空気に苛立ちすら覚えてしまっていた。

「ここから目と鼻の先でBETAが地中進行を行っているというのに、この奴らはよく今まで生きて来れたな……」

その戦車小隊長の愚痴に運転しながら操縦士が苦笑を浮かべて答える。

「今現在、このスエズ防衛線にて国連軍に続いて権力を行使しているのは中東連合ではなく、アフリカ連合ですからねー正直、アフリカ北東部以外で生きているBETAを見た事がないって奴もいる国ですから」

戦車小隊がちょうどF4ファントムが3機ハンガーに待機している前を通る。胸部ブロックが開いており、衛士たちは機体から離れて談笑をしていた。

「そういうえば……隊長って東ドイツ出身って聞いたんですけど、どうだったんです？ 当時のドイツは？」

何か話題を出そうとして新人である操縦士が基地に付いたことで気が緩んでいるのか、これまで興味があったものの訊けなかった話題を口にしてみた。

「おい、新入り。今はよせ」

その話題に反応したのは西ドイツ出身の砲手兵であり、発言した操

縦士に睨みを利かす。

欧州戦線はBETA大戦の初期から地獄絵図となっており、今現在、欧州で元からの国土を維持しているのはドーバー海峡を挟んでいたイギリスのみであり、フランス沿岸部ではイギリス上陸を狙うBETAを滅滅すべく、激しい戦いが繰り広げられている。

東ドイツ・西ドイツは欧州戦線の中盤にて長い間、BETAを強固な防衛陣地をくい止めていたのだが、東ドイツ政府機関での反乱などの政治的不安とBETAの大規模侵攻が重なったことよって一度は立ち直したが1980年代には東・西ドイツは崩壊したのだった。「いいんだ。まあ、正直に言えばあんまり思い出したくはないがな。あの時から戦車兵だったが、我ながらよく生き延びたとは思うな」

当時の記憶を思い出しながら小隊長が胸ポケットから煙草を取り出す。火を点けずに口にくわえると。

「故郷の東ドイツから西ドイツへの撤退、そこから西へ逃げ延びて……死にももの狂いで生きてきたってとこだ。すまん、英雄じみた話は生憎持ち合わせてはいない」

そう語る小隊長の顔色は陰り、操縦士はすぐさま謝罪するのであった。

そして数分後、戦車小隊は燃料補充の為に補給所にたどり着いた所、基地内で急な縦揺れが発生した。それはついさっき戦場で感じた揺れと同じであり、思わず表情が凍る。そして小隊長が指示を下す前に補給基地全体に鳴り響く警報音が事態を傳達する。

「き、緊急事態発生ッ！ 当基地、東2キロにBETAが出現！ 総員第1種戦闘配置ッ！ 繰り返す！ 総員第1種戦闘配置ッ！ 戦術機小隊はすぐさま出撃し、BETA群を殲滅せよ!!」

その警報を皮切りに基地内は半パニック状態となり、怒号と混乱が混じり合う。今日2回目のBETAとの戦闘にやれやれと思わず天を仰ぐと小隊長はインカムにて小隊各車両に告げる。

「最後の大事な事だ！ BETA共をぶっ飛ばしに行くぞッ!! 今日の俺らには幸運が付いてる。絶対に生き延びるぞ!!」

次の瞬間、返ってきた部下たちの応答に思わず小隊長は口元を緩めるのであった。

第38補給基地に対し、BETAが奇襲をしかけてから約3分後。前線から離れて跳躍ユニットによる全速に近いスピードで荒地を疾走する2つの機影があった。前方では黒煙が上がり、基地外部及び内部での戦闘が始まっていると思われる。一戦を終えた後、高速飛行で向かっていたので基地に到着しても推進剤は3割を切り、弾薬も心許無い状況であった。

だが、2機の機影は速度を落とす事もなく、まっすぐに補給基地を目指して進んでいた。疾走する2機の戦術機、それはライノ中隊から送り出されたライノ7とライノ6の不知火であった。

「もう、こういう時の嫌な予感。綾音ちゃんの本当にあたるんだよねえ……じゃあ、手筈通りにいくよ！ 敵味方が入り乱れているから突撃砲の誤射には注意してね。特に120mm」

「了解、でも私の突撃砲、さつき千里ちゃんに預けたから私、関係ないじゃ？」

BETA群に突入する前の最終確認だが、調子を狂わせるような上げ足取りをするライノ7の返しにライノ6は思わずジト目で睨む。

「もう、変な所で茶々入れないの！——ライノ6、交戦開始ッ!!」

補給基地周辺に現れたBETA群は約300ほど、基地の外縁部には何十匹の戦車級と数体の要撃級の死体が転がっており、迎撃に出たF4ファントムが撃破されていた。

救援向かう際に坑道出入り口でライノ7が捉えた微弱な振動、マップで確認した先にあったのがこの補給基地であったのだ。そしてライノ1に報告した際に万が一を考えて二人を補給基地に向かわせたのだった。

ライノ6は有効射程距離に敵を捕らえると同時に背部の兵装担架に装備されている突撃砲も前方に展開し、両腕にも構えた突撃砲による4門同時射撃を開始した。残骸などを貪っていた戦車級をピンポ

イントで次々と撃ち抜いく。

この補給基地には数回立ち寄った事もあり、この基地の内部に漂っていた空気感から防衛隊の練度がそう高くないと予測しており、助けるなら早急に敵を殲滅しなければ持たないだろうと残弾無視の短期決戦という選択を取ったのだ。

内部に向かおうとしていたBETAが背後から迫るライノ6に攻撃対象を変更する。その行動を見て、ライノ6は後ろに付いて来ているライノ7に告げる。

「ライノ7ツ、行つて！　ここは全部私が食い止めるから！　そっちは頼んだよ!!」

そう言った視線の先にライノ7が跳躍する姿が目に入り、その両手には長刀を持って基地内部へと姿を消した。

「綾音ちゃん……絶対に生きて帰ろうね」

見届けた相方に一人事を呟くとそつと笑うと、ライノ6は自分のすべき仕事をする為に向かってくるBETAに対し、4門の突撃砲、36mm総残弾数500発、120mm残り4発を使って戦闘を継続するのであった。

BETAに進行された補給基地内では逃げ惑う非戦闘員が障害物となり、迎撃に出た戦闘車両、歩兵部隊が有効打撃を与えられずにいた。その中にライノ中隊が救助した戦車小隊も交じっていた。彼らは残り少ない弾薬と燃料で防衛に回っている。

戦車上部の機関砲を放つもメインゲートから進行してくるBETAを押し返すには火力不足であり、彼らを周囲を警戒していた歩兵が建物の影から飛び出してきた戦車級に胴体を掴まれると声を出す間もなく頭部から咀嚼されていく。その光景は何度も目撃しているが、見るに堪えない。歩兵部隊も小銃などで応戦するも数が多く、次々と犠牲となっていく。

「目標変更！　右側、戦車級の群れッ！　仲間たちをせめて人としての死を送ってやれ……撃てッ!!」

戦車級に囲まれ、人形のようにグチャグチャにされている歩兵たち

に向けて主砲による砲撃を行い、双方とも微塵も残さずに殲滅する。「各車、三十メートル後方まで移動せよ——こちら515戦車小隊ッ！ 司令部、どうした!? 避難状況はどうなっている!?」

数少ない戦車と基地の歩兵部隊の応戦でBETAの死骸を積み上げるも、それを越えて迫りくる新手に防衛ラインを後退して対応しつつ、避難状況の確認を取るのだが返ってくるのは雑音ばかりであり、暴言を吐きだしそうになった瞬間、司令部のある建物が要撃級の硬い腕部によって崩れ落ちるのを目撃した。

司令部の陥落により思わず舌打ちをする小隊長は他の戦車に残弾の確認に問い、一呼吸後には報告が返ってくる。補給も出来ずに砲弾は尽きかけており、逃げるだけの燃料も残っていない。

「……………」

一瞬の刹那、小隊長が言葉を失い、返答が遅れるとその空気を悟ったのか操縦士と砲手の視線が突き刺さる。

外部モニターには戦車級が胴体部にある巨大な口を開き、自分達を食い殺そうと迫ってくる。

2号車が残りの残弾を気にせずに砲撃を行い、3号車からは部下たちが逃げ出そうとしていた。もはや戦車小隊も統制がとれずにいた。小隊を任された身として、部隊員の命を最優先に考えた結果、小隊長は備え付けのアサルトライフルに手を掛けるとハッチに手を掛けて残り二人に命令を下す。

「いいか。残りの砲弾を撃ちながらお前たちは後退しろ！ 少しでもこの基地から離れるんだ！ スエズまで行けば生き延びれる」

「し、小隊長はどうするつもりで!?」

動揺の隠せない操縦士の言葉に小隊長は達観した表情で自分の部下への最後の言葉を伝える。

「部隊の穴を埋めるのが俺の役目だ。時間稼ぎぐらいは作ってやるよ——あとは頼むぞ！」

そう言って引き止める言葉を振り切って小隊長は外へ飛び出した。インカムで2号車にも同じような命令を告げる。

「隊長……り、了解、しました……砲撃しつつ、後退。撤退するっ!!」
砂塵を上げて後退しつつも、最後までBETAに撃ち続ける部下たちの厚意に残された小隊長は不敵な笑みを浮かべると、その胸に誇りを覚え、手にしたアサルトライフルの銃口を向けて発砲する。

「貴様らに！ 殺された俺の家族ッ！ 俺の故郷ッ！ 部下たちの無念ッ！ 今、ここで晴らしてもらおうぞおお!!」

その瞳に憎しみを込めて、その言葉に恨みを吐いて、引き金を引き続ける。

「うおおおおっ!!」

自分に突っ込んで来る戦車級に最後まで狙いを定めて臆する事なく撃ち続ける。

小隊長が今日で自分が死ぬ事を覚悟したその瞬間——何処からの突風によって小隊長の身体は吹き飛ばされたのだった。

3メートルほど吹き飛ばされるも何とか受け身を取ったが酷い脳震盪でとても立ち上がる事は出来ずに、最後に意識を失う前に目にしたのは長刀を構えた青い戦術機の姿であった。

前方には見えるだけで40体ほどの戦車級、更にその後方には要撃級が4体の姿を確認する。

自分の後方には味方の歩兵が数名、強行着陸で吹き飛ばしてしまった兵士は脱出しようとしていた戦車が一両戻ってきて、兵士を回収していった。その状況把握中にも飛び掛かる戦車級に一闪、また一闪と剣戟を浴びせるライノ7の不知火。

「もう、遠慮はいらない。こいつらは殺す。一匹残さずに殺し尽くしてやるっ……」

操縦桿を握る手に力が入り、ライノ7は不知火を前進させる。長い前髪に見え隠れする暗い怒りが込められた瞳はBETAをゴミ以下の価値もない。人類の敵であるBETAを消し去る事しか考えていなかった。

一気に距離を詰めるとBETA側も自分たちのキルゾーンに突撃

してくる獲物に集中して攻撃を仕掛ける。瞬時に複数に分かれて多方向での包囲攻撃を行い、ライノ7に飛び掛かる。

もし機体に取り付かれてしまえば、戦術機の装甲は喰われ、あつという間に戦闘行動不能になる。それが旧型の第1世代機でも、新型の第3世代機でも同じだ。だが、今回は相手が悪かった。

同じ攻撃レンジを得意とし、更に攻撃行動を理解した上で瞬時に襲い掛かる戦車級の間合いを測る。

たった一瞬の時の流れを捉えるかのようにライノ7は右からくる戦車級2体を屠ると主脚で前進し、手を捻ると長刀の剣先でもう1体の戦車級を切り裂いた。一連の流れで3匹を殺し、動きを止めずに左手に逆手で持った長刀がもう1体を真っ二つとした。

次々とライノ7に襲い掛かる戦車級だが、そのほとんどが機体に触れる事も出来ずに血潮が舞う。

唯一、触れられたのはライノ7に踏み殺された1匹のみである。メインストリートが真っ赤に染まり、その中で立ちふさがる不知火の装甲は真っ赤に染まっていた。前衛の戦車級を倒し、次は要撃級へと目標を変更してライノ7は進む。

本来であるなら戦車級が全滅する前に要撃級が合流できるはずだったが、ライノ7の殲滅率が速すぎて合流できなかったのだ。それに後退している戦車小隊の援護射撃が基地施設に対して行われ、瓦礫を作る事で要撃級の進行スピードを遅らせた為でもある。

速い行動で自分の目の前まで来たライノ7に対し、要撃級もモース硬度15以上の硬さを誇る前腕部を振るう。それは旋回性能の高い要撃級の振り抜いた一撃であり、戦術機程度の装甲なら貫いてしまうほどの威力と速さを持つ。

だが、その攻撃は空振りに終わった……攻撃した要撃級が気づいた時には自分の身体を支える四つの四肢の内の一つが切り落とされていた事に気づき、次の瞬間に胴体部が真っ二つに切り裂かれていた。

ライノ7は不知火の空力制御と足さばきを自分の身体を扱うよう

に扱ひ、要撃級にフェイントを掛けて攻撃を誘ってから右側の脚部を切り裂いて、止めをさした。

「まず、一つ」

その隙に2体の要撃級がライノ7の左右から攻撃を仕掛けてくる。網膜投影上でBETA急接近の警告アラートが表示されるもライノ7は呼吸を乱さずに、その場で跳躍ユニットの主機を点火させると、右腕部を振り上げると跳躍ユニットで強制的に反転すると同時に今度は左腕部でサイドスロー気味に薙いだ。

跳躍ユニットの風圧で砂煙が巻き上がり、2体の要撃級はその間に動くことはなく、砂煙が引いたと同時にゆっくりとその巨体が地面に伏せる姿であった。右から来ていた要撃級は正面から長刀で止めがさされており、左側から来ていた要撃級は胸部右斜めから長刀が突き刺さっていた。

瞬時の判断としてライノ7は左手にしていた長刀を『投擲』し、みごと要撃級に直撃させたのである。

だが、実際に一番その事に驚いたのはライノ7本人であった。短刀なら投擲経験があったものの、自分の主武装である長刀を投げるのは命綱を外す事と同義であるからだ。

「……成功して、よかった」

思わず毀れる本音にライノ7はそこで身体に溜まった緊張感を解す。しかし、網膜投影に映る機体コンディションは肩から腕部に掛けて黄色に表示されており、かなりの負荷が掛かっていた。

投擲してしまった長刀は中央部分からひびが入り、使用不能となっていた。すでに連戦状態であり、この基地に来るまで残っていた推進剤の殆どを失っており、先ほどの噴射においてガス欠となってしまうた。

一度、態勢を整えるべく主脚による後退によって距離を取る。残る要撃級は1体、戦車級も隠れている為にどれだけの数が居るかは分からない。

センサーに目を配りながらも不意にライノ7は自分の後方にある基地の出入り口を確認する。そこには最後に脱出する戦車の姿があり、ライノ7は内心、ホッと胸を撫で下ろした。

これで最低限の自分の仕事は終わったと思えたからだ。仲間ではないが、自分が何も出来ずに人がBETAによって蹂躪させる光景は2度と御免だ。と——あとは隠れているBETAを殺せば任務終了である。呼吸を整えると長刀を正眼の構えで待つ。

機体はボロボロであるが、ここでBETAをくい止めなくてはならないのだ。センサーに複数の反応を検視し、ライノ7は迎撃態勢を整えた。が、ライノ7に隠れ迫るBETAの身体を閃光が貫く。

それは次々と残っていたBETAを仕留めていき、最終的に残っていた戦車級と要撃級を倒しきってしまったのだ。

「……………えっ？」

ライノ7は思わず気の抜けた言葉が漏れると同時にその閃光が放たれた方向を見上げると、そこには基地の城壁の上にて両手で突撃砲を構えているライノ6の姿があった。

「ごめん、外の片付けにちよっと手間取ったよ。でも、ベストなタイミングだったでしょ？」

少しふざけた口調でライノ6が述べると同時にライノ7も一気に緊張感が解けてしまい、ホッとして返信を行う。

「ふう、助けてくれて……………ありがとう」

「いいの、いいの。それにー綾音ちゃんの事だから基地施設の事や脱出する人たちの事を考えて、最初から近接格闘戦を仕掛けたんでしょ。本当に綾音ちゃんは心底、優しいんだから。推進剤切れ寸前なのに、本当に偉いね」

そんなライノ6のべた褒めぶりに、ライノ7は恥ずかしそうに首を横に振る。

「ちが、違うって！ その、私は元々接近戦の方が好みっていうか、そのくだから……………」

「ふふ、だからくになに〜？」

お互いの事をよく知る戦友・親友の言葉にライノ7は反抗したかったが、これ以上何か言おうとしてもライノ6に言葉遊びで勝った事はないので、ここはひとつ。

「だから、私が剣を振るう事で師だったお爺ちゃん、お婆ちゃん、父さん、母さん、お姉ちゃん、あと避難先で暮らしている妹や弟の為に私は……頑張らないといけない。鈴風流剣術、ここにありって、ね」そう告げてライノ7は構えを解くと、そつと長刀に視線を這わせた。ライノ6がそつと降り立つと不思議な表情で口にする。

「綾音ちゃんってさ。ちゃんと話せば他のメンバーと馴染めそうなんだから、もう少し素でもいいとは思っただけだよ」

「べ、別に他の人たちとちゃんと話すけど、私って、話するとき変に緊張しちゃうっていうか——もう、千里ちゃんの意地悪っ」

そう言っただけから覗く戸惑う表情が見えて可愛らしいが、これ以上からかって嫌われるのは嫌なので、ライノ6は謝罪するとポロリと小声が毀れてしまう。

「……こうしている時のあなたが、本当のあなたなんだろうね」

「え？ 何か、言った？」

ライノ7の言葉に思わず口にしてしまった事に気づくも、ライノ6は外面は落ち着いた様子を整えてニコツと笑顔を作ると言う。

「ううん、ただ綾音ちゃんはやっぱり可愛らしいなって言っただけだよ」

「むむ、もう……あ、そういえば、私たちの部隊が今、どうなっているか分かる？」

先ほどから変な会話な流れになっている為にここでライノ7は会話の流れを変えるべく、戦況の事について話題を出す事にした。

どうも機体に色々と無理を掛けてしまっているのか、先ほどから遠距離通信の調子が悪く。ライノ7の不知火は先ほどから中隊で共有する戦術マップが更新できずにいた。流星に事情を知ったライノ6も真面目になり、ライノ中隊に敵の殲滅に成功と報告すると、すぐさ

ま連絡が届く。

どうやらライノ中隊側もさきほど作戦完了し、現在、救援に向かった戦術機部隊と共に帰還中というところらしく、こちらに合流するのは10分ほど掛かるらしく、合流までライノ7とライノ6には再編した防衛部隊が戻ってくるまで待機という命令が下された。

ライノ7達が補給基地からBETAを殲滅してから約5分後、補給基地から救援要請の為にスエズ基地から防衛部隊の先発隊がやって来た。数機のF16とF4が基地内に着陸し、基地のメインストリートに装甲車両が流れ込んでくる。武装した歩兵が降りると周辺の警戒を行い、小型種が潜んでいないかをチェックする。

「各部隊は分散しつつ、小型種が潜伏していないかをよく確認しろ！一人での行動は禁ずる。かならず二人以上で行動を行え」

歩兵部隊の部隊長が次々と命令を下して、部下たちも即座に展開していった。そして次に視線を向けたのはこの補給基地を救った2機の戦術機であった。通信役の兵士にすぐにチャンネルを開かせると、まず礼を述べた。

「こちらはスエズ基地所属の第88工作復旧大隊である。諸君らの活躍によってこの補給基地や人命を救ってくれたことに、同胞たちに変わり礼を述べたい。感謝する」

その返答にライノ6が返答を行う。

「国連軍所属、日本帝国軍特別中東派遣部隊、第604戦術機中隊です。今、現状はBETAの再侵攻はないと思いますが、十分に気を付けてください」

「了解した。あとの処理は我々に任せて、君らは撤退してくれ」

そう告げられると同時に補給基地上空に数十機の戦術機が現れ、その中からUNブルーで彩られた機体はその群れから離れて基地近辺に降り立つ。

ライノ中隊の本体が合流するために補給基地に立ち寄ってくれたのだ。その後、基地内のBETA個体は確認できず、基地外部で待機

していた工作部隊の本体が続々と基地内へ進み、復旧作業の準備を開始する。

推進剤を使い切っていたライノ6とライノ7には推進剤の補給が行われ、補給後、中隊全機が揃ったライノ中隊はようやく帰還の途へ就くことになった。

砂漠を駆ける斬撃 ⑤

BETA大戦初頭時、この中東方面の戦いはアフリカ大陸をBETAの進行を阻止する為の重要な戦線であり、今のアフリカ大陸には中央アジア、中東、更に欧州から避難してきた難民が多く身を寄せており、大陸各地に避難してきた政府の租借地が用意され、多国籍化が深刻化した。

その際に欧州及び米国からの技術提供などによってアフリカ大陸全体規模でのインフラ整備、高度経済発展が進み、10数年前には考えられなかったぐらいに近代化を遂げていた。

また戦線には程遠いアフリカ西部・南部では大都市が形成され、欧州連合や米国による戦術機の生産工場の整備が進み、国土の大半を失った欧州連合軍や他国の軍、そしてアフリカ大陸で配置される国連軍に各兵器群の補填が可能となり、これによってBETAに対して対抗が可能となったのである。

そして近年、スエズ基地ではBETAに対して戦術機運用や戦術の見直し計画が図られる事になっていた。その計画の為に欧州連合軍の一部やわざわざ遠い日本帝国から戦術機部隊が派遣された理由に繋がっている。

スエズ防衛における戦術機部隊の大半は国連軍並び中東連合軍で賄っており、戦術機は基本米国製の戦術機を使用しているものの中央アジアから人々が流れてきた際に逃げ遅れたソビエトの技術者などによってソビエト連邦の戦術機も大戦初期に投入されて、数は少なくなつたものの未だに運用されている機体もある。

戦術が見直される事になった理由としては1989年にスエズ防衛線で起きたBETAの大規模な地中進行による奇襲によって、戦術機大隊が壊滅状態となった出来事があったのだ。4か月の死闘の末

にスエズ運河防衛は成功するも原因は展開していた戦線の中央に地中進行を受けて部隊が分断され、戦術機部隊は初ともいえるBETAとの近接戦闘を余儀なくされてしまった。

近接戦闘の練度不足、そして教育する教導部隊が無い事から新たに部隊を創立する事も難しい状態であった。

それに物資の援助は米国は主であった為に米国式の戦術機運用を止めるといふ事は自分たちに対して嫌悪感を抱かれてしまう危険性もあつた為に速やかな実行は出来ず、水面下での計画だけで進んでいた。

そして、時は西暦2000年、ようやく対BETA戦における戦術機部隊の設立議案が通り、その教導部隊として挙げられた一部に近接格闘戦に主とした運用を行っている欧州連合、それに日本帝国が彼らの目に留まったのだった。

欧州連合はアフリカに租借地としての貸しがあつた為に元から部隊を派遣されていたが、新たに第3世代機のみで構成された部隊を派遣する事を決定した。

日本帝国は佐渡島にハイヴを抱えている為にわざわざ中東へ戦術機部隊を派遣する余力は考えてなかったが、中東連合の粘り強い交渉と取引などによって何とか日本帝国から戦術機部隊を派遣してもらう事が出来たのだ。そして――。

西暦2001年、現在。

日本帝国軍のライノ中隊は中東の戦術機部隊などと共同してスエズ防衛に大きな貢献をもたらしている。その姿は戦場では臆する事なくBETA群に突入する勇猛果敢の姿は共に戦う部隊の士気高揚にも貢献していた。

部隊のコードネームのライノ(サイ)の名前の通りの活躍は一目で置かれている。

遠い中東の地で戦う彼らはの事は日本帝国政府の一部しか知っておらず、極秘裏に派遣された事で知る由もなく、今も荒れた大地の上

でUNブルーの不知火が人類存亡の一端を抱えた戦場でただひたすらに任務を果たす事に駆けていた。

2001年、4月、ライノ中隊は依然として健在である。

砂漠を駆ける斬撃 終

続く。

大地を切り裂く鎌鼬 ①

1960年代から始まったBETAとの戦争により地球人は多大なる被害を被ってしまった。その中で欧州は1993年には奮戦虚しく、英国を除いた全て領土をBETAに蹂躪されてしまったのだ。

欧州・中央アジアから数えきれいほどの難民が生まれ、BETAに追われながら戦火が届いていない国々への逃避行が始まった。その当時、世界的に見ても工業力や技術力でも劣っていたアフリカ各国は高水準で高い工業・技術力を持つ欧州からの避難民を受け入れる事をすぐに表明し、アフリカ北部に広がる沿岸部などに欧州各国への租借地として貸し出す事になったのだ。

その受け入れの代わりにアフリカ側は欧州の持つ人材や技術レベルの提示を行わせる事で自分たちの基礎技術力の向上を目的とし、国家の生存の為に欧州側はその提示を受け入れた。

その後、アフリカは急速な近代化発展を為したのだが、その反面でアフリカの半欧州化現象が発生し、このおかげでアフリカ大陸での文化や生活が一気に欧州色に染まり、欧州の文化侵略が意図せずに進んでいったのであった。

2001年、4月10日。

アフリカ北部、欧州連合軍演習場。

2つの

今回の対戦術機演習について――

使用する装備、ペイント弾入り突撃砲1門。防刃カバー付き長刀を一つ。

勝敗は指定された各部位への攻撃ヒット判定によって加算されるポイント合計で勝敗を決定する。

なお、センサー類が集中する頭部、コクピットのある胸部への直接打撃は禁止として、跳躍ユニットへの攻撃も禁止とする。

演習時間は15分とし、今回、使用される推進剤などの消耗品や機

体の修繕費は主催の中東連合及びアフリカ連合から支払わせる事となっている。これらの条件を含む件で今回の『実機』を使ってにおける本格的な近接戦闘演習を行う事にする。

荒地特有の乾いた空気を撃ち砕くかの如く、戦術機の跳躍ユニットの轟音と鈍い剣戟の音が重なり合い、不協和音が鳴り響く。2つの異なる長刀がぶつかり合う瞬間に機体が大きく揺さぶられ、管制ユニット内にいる衛士は振動と加速によるGに耐えながら集中力を絶やす事はなかった。

現在行われているのは戦術機同士の間接近格闘戦。しかも、シミュレーターではなく実機を使用した模擬戦闘であった。

激しくぶつかり合う2機の戦術機の様子をモニターで観戦している中東連合及びアフリカ連合の軍高官たちは殆ど経験した事のない戦術機同士の本格的な格闘戦に息を呑む。

その左右には演習中の戦術機が所属している各中隊の関係者たちがさまざまな表情を浮かべながら、どう決着するのかを見守っていた。

一方は欧州連合軍、フランス陸軍アフリカ派遣部隊。第35戦術機中隊、ガラム中隊所属の第三代戦術機『ラファール』。

その相手をするのは日本帝国軍・中東派遣部隊。第604戦術機中隊、ライノ中隊所属の第三代戦術機『不知火』であった。二機の周囲には赤と青のペイントがまき散らされている。

戦闘開始直後、ペイント弾入りの突撃砲による牽制射撃を行っていたものの、そのペイント弾はほんの500発ほどしか入っておらず、もとより今回の演習が近接戦闘中心だったという事もあり、早々と突撃砲による射撃戦を止めて近接戦へとシフトしていった。

長刀同士で打ち合う二機はお互いに引かず、前へと踏み出す。目の前にいる相手を打ち負かす気持ちでその手に持った長刀を振るい、打ち合った。

不知火が跳躍ユニットの推進力によってわざと砂煙が巻き上げて、剣筋を誤魔化そうとするするもこれまで経験してきた技能と勘によつてラファールに乗る衛士『ミランダ・アルセイフ』少尉は鋭く迫る長刀の軌跡に集中させ、その一撃を払いのける。

「……ちっ！ 予習したデータよりも速い。でもね——」

まだ幼さの残る顔立ちに毛先に跳ね癖のあるブロンドヘアと青い瞳は純フランス人としては少々珍しく、それは彼女の母親が北歐出身であるからだろう。チームメイトとは仲良くやっっているし、部隊内でも年齢が若い為に可愛がられている彼女であるが、その瞳は得物を狙う狩猟者のように相手を捉えていた。不知火の姿を間合いに入れると今度はラファール側からアタックを仕掛ける。

「私にだって突撃前衛……ガラム4としての意地があるんだからあッ！！」

戦術機同士の近接格闘戦は何度も訓練で行ってきたものの、今回の演習はこれまでに感じた事ない脅威感をミランダは与えられていた。

突撃前衛（ストーム・ヴァンガード）と呼ばれるポジションは戦術機部隊でもっとも敵と接触するタイミングが早く、部隊内で操縦技術や近接戦闘に長けた衛士が任される重要な立ち位置ともいえる。

その為、ミランダはその肩に自分達の中隊の名誉や威厳が掛かっており、今までBETAとの戦闘で生き残って来た自信もあつてか敵機である不知火をどうやって打ち負かそうかと考えていた。二週間前に決まった今回の演習の為にシミュレーションを繰り返し、不知火のスペックデータを頭に叩き込んできたというのに——

目の前にいる不知火の動きは全くの別物と思えるぐらいに機敏であり、振り抜かれる長刀の一撃は回避するだけでも神経をすり減らすほどに正確な攻撃であり、絶えず集中しなくてはならなかった。

モニター越しだけで見ていれば不知火が長刀を振り回す姿に見えるのだが、その一撃一撃が確実にラファールの機影を捉えており、ここまでの剣戟を繰り返す不知火の衛士をミランダの兄、ガラム中隊の

中隊長であるガラム1との演習以外で体験したこと無い。気を抜けば集中力が切れそうになるミランダの額に汗が流れ、苦悶な表情を浮かべると不意に不知火が臨戦態勢のまま、突然と距離を取る。

「な！でも……少しだけ助かった。かも」

その間に呼吸を整え、緊張感を解すとミランダは網膜投影で映し出される機体コンディションと演習の残り時間を確認する。

「あと五分。もうそろそろポイント的にも先取した方が楽ね」

ここまで有効打はなく、ポイントはお互いに0ポイントであった。

一方、その頃——距離を取った不知火、その管制ユニット内には長い黒髪に黒い瞳、純日本人である容姿をしている女性は、日本帝国軍ライノ中隊、ライノ7の鈴風・綾音少尉が急に入った通信画面に視線を向けると細い溜息を吐いた。

画面内では通信者である中隊長のライノ1が映り、その背後には今回の演習を企画した中東・アフリカ連合の軍高官の姿が見られた。

「こちらライノ1……ライノ7へ。状況を察するにそこそこ相手の様子見も済んだ所だと思うんだが、その解釈で間違えはないか？」

その説明に綾音は静かに頷くと応える。

「はい、それで問題はありません。残り時間的にもこの辺で決着するのがいいですよね？」

「そうで構わない。これまで見せた戦闘機動で依頼主も戦術機の格闘戦がどういったものかが解っただろうな。あとは勝つだけだな」

「了解。ではこれから少しばかり機体に負荷のかかる動きになると思うので整備士さん達には後で隊長から謝ってもらってもいいでしょうか？」

そう言っただけ片目を閉じて人差し指で口元を抑えて黙っておいてくださいというアクションをすると苦笑を浮かべるライノ1は苦笑を浮かべ、画面外にいる数名の整備員たちから「あまり無茶はするなよー」と声が聞こえてきた。

その台詞に綾音は自分の事よりも機体の事を心配しているんだろうな。と思った綾音は口元に少しだけ笑みを浮かべて再度、「了解」と告げて通信を終える。そして意識をラファールに集中させると長刀

の剣先を向けて構えた。どうもあちら側も同様に声を掛けられ
しく、同タイミングで長刀を構えてくる。

「本気を出すとか、そういう訳じゃないけど、『今回』の勝負は負ける
訳にはいかないだよね」

ラファールが加速を掛けて振りかざされる攻撃を剣先で軌道を逸
らすとその動きのままにラファールの左肩にスツと長刀の太刀筋を
当てると手ごたえを感じた綾音はすぐに機体を反転し、自分の間合い
に敵を捕らえると思わず口から言葉が漏れる。

「負けたら、メイド姿でご奉仕とか、絶対に嫌だし、うちもフランスも
何処の国でも男の人って考える事は同じなんだから……」

何度も打ち合って相手の太刀筋や癖などは大体、把握した綾音であ
るがいつの間にか決められていた演習の罰ゲームの内容に不満を漏
らした瞬間、その僅かの隙を狙って相手も反撃を行う。

ガンッ！ と衝撃と共に機体左腕部にダメージが奔る。防刃カ
バーがつけられていると言ってもその物理的衝撃は強く、左腕装甲が
変形して肘から先が上手く動かなくなってしまった。

その瞬間、視線が鋭くなる綾音は相手に対する評価を変えるので
あった。正直言つて、先ほどまで相対していたラファールの動きはそ
こまで対人戦、もとい戦術機による近接戦闘が不慣れだと感じ、その
為には太刀筋が読みやすかったのだが、どうやら過小評価だったよう
だった。

「最初見た時は少し齧ったような腕だったけど、この数分で近接戦の
腕を上げて……覚えが速いのか、才能なのか、分からないけど――
――私の不知火を傷つけたお礼は返してもらおうから」

思いつきりのよくなった相手の動きを回避しながら、綾音はあくま
で心を冷静にして、相手に出来た隙を逃がさずに鋭い一刀を放つので
あった。

大地を切り裂く鎌鼬 ②

初めて顔合わせした時から、何処かいけ好かない奴だなっと思ったのだが、ミランダが感じた演習の相手である綾音の第一印象であった。

相手である自分の事を見ていないようで、気にしない済ました表情を浮かべる綾音に対しミランダは、絶対にコイツに負けたくないと思っただ。

だが、演習が開始して剣を交えた瞬間、そこに自分と綾音との間にある圧倒的実力差を直観的に感じてしまったのだ。

シミュレーションとは全くの別物、機体性能すら当てにならないほど、綾音の操る不知火は俊敏に動き、その太刀筋を追うのに精一杯であった。剣捌きにおいては綾音の方が優勢であり、誰が見てもミランダが負けるといイメージが場の雰囲気漂っていた。

しかしミランダには綾音に比べて一つだけ秀でた物があった。それは最後まで諦めない『悪あがき』であった。演習で初めて綾音と剣を交え、改めて自分との実力差を感じながらもミランダは決して諦めなかった。

どうしたら相手の剣戟を上手く避けられるか？ どうしたら相手の裏を突けるか？ 自分の行動をもっと最適化して勝ち筋を見極められるか？ など、動きを止めずにミランダは思考をフル回転させながら、相手の動きを観察し続けた。

相手も人間ならば、絶対に隙が生まれる。そのチャンスを逃がさない為にもミランダは死んでも食らいついてやろうと機体を操作した——その瞬間が目の前に飛び込んできたのであった。

相手の動きが鈍った瞬間、ミランダは瞳を見開く。絶対に負けるか!! という気持ちを載せた一撃がまるで吸い込まれるように不知火

の左腕に直撃した。

「ッ、私だって……私だって！ 無駄にここまで生き延びて来た訳じゃないんだあああッ!!」

声を荒げるミランダ、絶対に諦めない心と強く思った気持ち力が力量を底上げする力となった。

「……負ける、もんか」

その瞬間でも慢心せずにミランダは連撃を繰り返す。長刀での打撃に合わせて腕部に固定装備されているブレードベーンも攻撃の動作に交えて相手に攻撃の隙を与えないように立ち回った。

だが、不知火側も動きがこれまでと違った動きを見せる。長刀に込められた一撃がより重く、連撃が速く繰り返されるのに芯を捉える一撃に受け止める度に機体全体が震えるほどで一層増す激しさに長刀に装備されていた防刃カバーが千切れ、部分的に実剣同士がぶつかり合うほどになっていた。

その摩擦で火花が上がり、二機が振るう剣先に華を散らす。跳躍ユニットが点火し、広い演習場で斬り合う剣舞はまるで演劇を見ているような印象さえ、抱いてしまいそうになる光景であった。

激しさを増す演習に長刀の防刃カバーはすでに無くなって刃が剥き出しになり、もし胸部ブロックに直撃すれば、そのまま機体ごと衛士の命が終わる。

その光景をモニターで見ている中東・アフリカの軍高官達はざわつき、演習の中止を告げようとした瞬間、両中隊から「待ったッ」という要望に目を丸くする。

「君たちは彼女らの命が惜しくないのかねっ!？」

その内の一人が思わず声を上げる。も、両中隊長は責任は自分達が持つ。とこの演習を強行するのであった。

両中隊長はこの演習で二人の衛士の限界値や意識的なが高まるだろうと思いい、その思考が同じだったのか、お互いに視線が合うと頷きあった。

そして自分らの部隊員が勝利する事を信じて戦いの行く末を見

守った。

交を描くようにぶつかり合う二機の戦術機は全身を砂煙で汚れ、その手に持つ長刀の刃は激しい切り合いの連続で所々刃がほころんでしまっている。

互いが並行し滑走していく際に先に仕掛けたのは不知火が仕掛ける。右脚を軸にして急停止を行う。強引な方向転換を行うも勢いを殺さずに短距離跳躍でラファールとの距離を一気に詰める。

その反応にラファールも動きを合わせてきた。両脚で着地すると膝を曲げて、脚部に掛かる衝撃を吸収し、姿勢を安定させると迎撃態勢を整えた瞬間に不知火が先に長刀を振り抜く。

左肩部、関節部分を狙った一撃に気づいたミランダは咄嗟に肩部スラストで機体の重心を強制的にずらすもその動きに即座に対処する不知火は手首の角度を変えて追走する。その剣先は肩に装備されていたカーボンブレードで直撃を避ける。

「くッ、まだ、まだまだッあああッ!!」

鋭く踏み込まれた一撃に肩のカーボンブレードは切断されるも、ミランダは臆せずラファールを不知火に向けて突っ込ませる。加速してラファールが体当たりした所為で機体にはこれまでにない激しい衝撃が走る。

揺れる視界の中、思った以上の行動を見せるラファールに不知火に乗る綾音も思わず声を上げる。

「ッ、こんな事で……負けてられないッ!!」

ラファールを撥ね退けるようにダメージを負った左腕を強引に機体同士の間に入れると緩衝材として払いのけると機体への直接のダメージを避ける。その瞬間、機体ステータスに左腕全体が真っ赤となり、大地には捻じ切れた不知火の左腕が音を立てて転がっていく。

バランスが崩れた機体を立て直すとお互いにボロボロとなった長刀を向けた。演習終了時間が2分を切った時、不知火に通信が入った。

それは指揮所ではなく、目の前にいるラファール、ミランダからの通信であった。

「どう？ 自分よりも格下に噛みつかれた感想は？ あんまり嘗められるのは好きじゃなくてね」

綾音を見るミランダは口角が上がり、不敵な笑みを浮かべる。その姿を見て綾音の瞳は誤魔化せない。余裕なんてものは一切なく、殺気を隠せない視線に綾音も真摯に答える。

「ええ、確かにあなたの言う通り、この演習は嘗めていたし、正直こうなるとは思っていなかったよ」

そう言いながら、視界に掛かる前髪をはらうと綾音はミランダに向けて長刀を突き付けて挑発を込めて宣言する。

「だからこそ……次の一撃で終わりにしてあげる」

「……ええ、奇遇だわ。私の方こそ、次で終わりにしてあげますわッ！」

最後にお互いに睨み合うと通信を終える。それぞれの得物をしっかりと握ると弧を描くように機体を加速させ、集中力を高めていく。

砂塵が舞い、熱波で煌めく大地で今——二機の戦術機が雌雄を決するべく、お互いに研ぎ澄まされた精神力を持って来たるべき瞬間を待った。その緊張感は画面越しにも伝わっており、見守る人々も息を呑んでその時を待つ。

——その時がやってきた。

残り演習時間が20秒を切った瞬間、加速を続けて間合いを計っていた二機がほぼ同時に相手に向かって突撃を開始した。

15秒前、充分に加速を得た二機はあつという間にお互いの機体を間合いに捉える。

10秒前、ラファールは不知火を中心に捉えると跳躍ユニットによる加速と長刀の重さを最大限に利用した一撃を叩き込んでいく。

5秒前、相対する不知火は振りかぶられた長刀に自らの長刀の軌跡に合わせて、真向から刃を下から上へと振り抜いていく。お互いの刃が重なり合う瞬間、ミランダは自分の勝利を確信していた。

すでにボロボロになったお互いの長刀だが、自分の持つ長刀は重さで叩き斬る物であり、切れ味はさほど威力に比例しない。

それに対し、不知火の長刀は引いて斬る物であり、切れ味が悪ければ比例して威力が低下してしまう。

その理由もあってミランダはこの状態であるなら自分の方に分があると考えていた。

そして演習残り時間——プラス2秒後。

甲高い残響が耳に届き、ミランダは自分の目の前で起きた光景に自分の目を疑った。宙を舞ったカーボンの塊が自分の手にしていた長刀の一部だと認識した後、改めて自分の手にした長刀は中間部から切断されていて、乾いた大地に残骸が突き刺さる。

「……そんな、うそ……だ、だって、貴女の長刀だって、もう!？」

視界を上げるミランダが振り返って、自分に向けられる長刀を持つ不知火の姿に問わずにいられなかった。思わず通信を接続し、不知火に乗る綾音に問うてしまう。

ウインドウに映る綾音の姿も疲労した雰囲気でもミランダに視線を合わす。そこには初めて顔合わせした際に見せた冷めた表情はなく、頬が高揚していて、瞳はキラキラとしていた。

自分から通信したのにミランダの方がどうやって声を掛けるかと迷ってしまうほどだった。

すると呼吸を整えたのか、口元に見えを浮かべると綾音の方が返事をする。

「確かにこっちの長刀ももう限界だったよ。運が悪かったらこっちがやられたかもしれないけど、でも今回は私の勝ち、だね」

そう言っただけ満足そうな表情を浮かべる綾音は子供っぽく笑い、それを見たミランダは一瞬だけポカンとしてしまうものの、どこことなく拍子抜けしてしまい、口元を抑えて笑い出す。

「ふふふ、貴女って本当に変な人ね——いいわ。今回は私の負けよ。

でも覚えておいて、次は私が勝ちますから。その剣を叩き斬ってやり
ますので覚えておきなさい」

「覚えておくけど、次も負けるつもりはないからね」

そうやって二人の会話が終わった瞬間、両機に通信が入ってきた。
ウインドウを開くとそこには部隊長を含む仲間たちの姿が見えた。
綾音は自分が勝利した事を確認する為にライノ1に問うと。

「まあ、状況的にこちらの勝利には違いないんだが……」

なぜか言葉に詰まるライノ1の姿を見て首を傾げる綾音であった
が、よく耳を澄ますと複数の叫び声が聞こえてきた。

「だから嫌だったんだよ。実機での演習なんて！ あの破損状況
じゃ、中破レベルだぞ……」

「左腕の予備は——隊長さん、ライノ7に腕を拾ってこいつで伝え
ておいてくださいッ！」

「今日は機体をバラして……明日からオーバーホールだな。また格納
庫暮らしが始まるなあ〜」

と、騒がしいレベルで騒ぐ整備員たちの声に思わず綾音は視線を逸
らし、その姿にライノ1は苦笑を浮かべるといつの間にかその後ろに
整備副班長が現れると綾音に向かって告げた。

「さっき向こうの整備班と話したんだが、後日の罰ゲーム、二人とも決
定事項って事で。以上、そちらの意見は一切聞かないので、よろしく
〜」

そう捨て台詞を吐いて日本帝国とフランス陸軍の整備員たちがぞ
ろぞろと演習指揮所から退出していく。

何か言いたげな綾音の表情を見て、ライノ1はすまなそうな表情で
「つて、事だから頼むな」と釘を刺され、綾音は大きく溜息を吐くので
あった。

すると通信を切り忘れていたミランダも同じような言葉を伝えら
れたのか「お、お兄様ッ！ 本当にするの!？」と驚きの声を上げてい
た。

そして通信を切る際にミランダが綾音にぼやく。

「ねえ、これってさ、結局の所……私たち勝っても負けても罰ゲームを

やらされる運命だったんじゃない？」

「……もしかして最初から仕組まれていた、とか？」
呆れ顔になる二人は思わず同時に溜息を吐いた。

大地を切り裂く鎌鼬 ③

3日後、スエズ基地、戦術機地下ハンガーにて。

とぼとぼと、通路を歩くライノ7こと鈴風・綾音少尉の足どりは重く、その表情も何処か浮かばれない。その隣を同じような表情で歩くフランス陸軍のミランダ・アルセイフ少尉も一緒に歩いていた。

そして、その背後には使いの者ごとく、付いてくるライノ6とガラム8がニコニコと談笑しながら二人の後に続いていた。

例の罰ゲームは昨日の内にフランス側で一度行われており、今日は日本側で罰ゲームが行われる。その際に被った精神的ダメージが大きく、それをまた行われるという現実が綾音とミランダの足どりを重くする。そうしてゆっくりと更衣室に入っていった。

「これだったら、まだBETAと殺し合った方がマシな気がする……」
椅子に座ってぼやく綾音の後ろにライノ6こと、綾音の幼馴染である浅倉・千里（あさくら・ちさと）が櫛や化粧品などを次々と用意していく。昨日も同じことを思ったのだが、この幼馴染が活き活きとしている表情を見て鏡越しに綾音は頬を膨らませる。

「もう、ちーちゃんは他人事だと思ってさく完全に私ら、見世物じゃん」

「はいはい、だったらもう少し不知火を壊さないように扱いましょね」

「それは……私だって気を付けているんだけど……」

ニコツと笑みをこぼす千里は慣れた手つきで綾音の黒髪を梳いていく。元より綺麗な髪質をしているので、一手間加えていくだけで見栄えが断然良くなるのだが、綾音自身はお洒落については全くの無頓着であるのでこうして髪を梳く機会は多かった。

鏡越しに見る綾音はジツとしていれば羨ましいほどに可愛いのに、今はジト目でムスツとしている。部隊内では見せない素の反応が可愛らしくて後ろから抱きつくくなる衝動に駆られそうになるがグツと

堪えて拗ねた綾音に言葉を投げかける。

「——それは皆も知っているし、私だって分かっているんだよ」

「え？ 何が？」

髪を梳かす手が止まり、思わず振り返りたくなるがセットが崩れてしまうので綾音は視線だけを鏡越しに千里に向ける。

「だって綾音ちゃんが何時も先頭に立って、部隊の皆の道を作ってくれるから。一番危ない役目を自分から背負ってくれてるのは、言葉にはしないけど皆、知ってるよ」

「……私、突撃前衛だし、それしか出来ないし、それに、それにさ、何時もちーちゃんが後ろに居てくれるから出来る事だから……」

後ろから聞こえる言葉と鏡越しに見る千里の様子が気になる綾音は改めて死地に何度も付き合ってくれた幼馴染に対して礼を述べる。

「二人だけじゃ、どうしようもない時なんていっぱいあったよ。初陣の山口の時も、京都の時も——あと、一番辛かった東海道撤退戦の時も……皆が、ううん……ちーちゃ、千里ちゃんが居てくれたから私も頑張れたんだよ」

ふと、綾音の脳裏に記憶が蘇る。

あの時の事を思い出すたびに胸の奥がチクリと痛む。生き残るだけで必死でBETAの進撃をくい止める事が出来ず、目の前で仲間が、民間人が、次々と犠牲になっていく、地獄絵図を鮮明に記憶しまっている。

自分が知っている人達が消える光景は二度とごめん。そうならないように努力して、戦って生き抜いていたのだ。

いつの間にか綾音は自分の肩が震えているのに気付いた。それが怒りなのか、悲しみなのか、自分ではすぐに理解できなかったが、考えるよりも早く肩から腕が周り、後ろからそっと抱きしめられたのが判った。

「私も、だよ。綾音ちゃんが一緒に居てくれたから、頑張れた……お互いここままで生きて来れたんだから、お相子様」

そっと回された腕に手を置き、優しそうな微笑を浮かべると綾音は「ありがとう」と囁き、落ち着きを取り戻した千里も目じりをそっと拭

うと」「こちらこそ」と告げると髪の毛のセットを再開するのであった。それを横目で見ていたミランダ達はというと。

「あ、私たちもしてみます？ ギュツとかハグとか？ それとも頬を合わせてスリスリとかでもいいですよ!? 私的にはウエルカムですから」

鏡越しで言うガルム8の表情はやや興奮気味であり、ミランダは呆れ顔で拒否する。

「……しないわよ。てか、年下に欲情、しかも同じ女にとか少し気持ち悪いです」

「あふん、そういう目つき戦闘中のガルム1に似てるく兄妹って感じがしますね〜」

「兄様の話はもういいから、早くセットしちやってください」

そう言われて渋々ガルム8は髪の毛のセットを再開し、ミランダは横目に映る綾音たちの姿を見て思う。

『昔からの友人、か——今のご時世、それは貴重な存在よ……大切にしない』

不意に脳裏を過るのはまだフランスという国が存在していた時の事。自分がまだお嬢様として生きていた幼い日々の記憶。それは今になってみるとまるで夢を見ていたかのような時間だった。

あの時に遊んでいた友人達はフランスを脱出する際に離ればなれとなり、今も行方はつかめていない。

ただ無事であればと願うばかり、ミランダは遠き祖国の思い出を大切に心へ仕舞い込むのであった。

数十分後、いつもならハンガーに係留されている戦術機に整備員たちが集まって仕事をしている光景が窺えるのだが、今日は様子が違った。機械音はせず、すでに手を止めて一か所にざわざわと集まっていた。

「いやあ、眼福するなあ」

「そうっすよねー見慣れている強化装備も冷静に考えるとアレツすけ

ど、何時もとは違う姿つてのはギャップがあつていいっすよね」

集まつた整備員の中には少なからず女性もいるので甲高い黄色い声も混ざり、楽しんでるようであった。

「きゃあー！ 少尉く可愛いい〜こっちに視線ください〜目線は上目使いで……はい、もう一枚!!」

「ナチュラルな金髪つてやっぱり綺麗よね。それに戦術機の操縦も悪くないし——ねえ、もしよかつたらライノ中隊に来てみない？ え、スカウトはお断り？」

この騒動の中心にいるのはメイド服を着た綾音とミランダの二人であった。いつもはしない化粧を施された二人の見違えた綺麗な姿に歓声が飛び交っていた。これらの衣装の提供はアルセイフ家の長男からであり、それはミランダの兄であるアレクセイ・アルセイフ大尉からであった。

この状況は前日に行われた欧州連合フランス陸軍の戦術機ハンガーでも似たような状態となり、一つだけ差異があるとしたら、フランス側では和服を着て行った事、それとミランダの兄、アレクセイが和服を着た綾音に一目ぼれをして求婚を申し込んだぐらいであろう。

——求婚は速攻で拒否されていたが、どうも諦めてはいないようであつたが——

そして今回は日本向けという事でメイド服となつた。何故フランス人であり、このご時世でメイド服やら和服などを用意できたのかというのはまた別のお話。

メイド服を着てする事といえ——という事になり、作業員たち一人一人にお茶などを入れていき、笑顔を見せて奉仕するサービスをを行う事になった。家事などに不慣れな綾音とミランダが見せる仕草が終始、その場を和ませる結果となり、これで部隊内でのいいリラクゼーションとなつた。

当の二人はようやくお茶入れなどの奉仕を終えて、小休憩の為に椅子に座るとそれまで作っていた笑顔を崩し、意気消沈したように溜息を吐くと天を仰ぐ。

物凄い疲労感と共に、二人は同時に眩いた。

「これからもう少し丁寧に乗ろう……」

——流れていた穏やかな時間が終わり、戦術機ハンガーに機械音と共に人々の言葉が響き渡るとそこには何時もの光景が戻っていたのだった。

赤塵の旋風 ①

2001年5月18日 スエズ戦線にて――

その日、アンバーハイヴから突出した約3万以上にも及ぶBETA集団を迎撃する為にスエズ基地及びアフリカ大陸から大規模な戦術機甲部隊の投入を即座に決定した。

その中には各軍の派遣部隊も参加しており、日本帝国のライノ中隊、フランス軍ガラム中隊も含まれていた。

出撃準備を終えたライノ中隊のUNブルーに塗られた不知火が次々に地下格納庫よりエレベーターによって地上へと運ばれていく。アフリカ大陸のBETA最前線であり、最終防衛線でもあるスエズ基地は広大な滑走路を持ち、幾つかの主要施設は地上にもあるが、戦術機格納庫はその殆どを地下に移設されており、次々と戦術機が地上からせり上がってくる光景はスエズ基地の特徴でもある。出撃準備が整った部隊が順序よく出撃を繰り返していた。

跳躍ユニットの轟音の中でライノ中隊の戦術機を見送る一人の女性の姿があった。彼女は出撃するライノ中隊の不知火に対して敬礼を行い、戦地へ向かう戦友を見送ると自分の戦術機がある格納庫へ戻っていく。

洒落つ気もなく伸ばされた黒髪が熱風で揺れるのを抑えながら、長く垂れた前髪から覗く瞳は何処か寂しそうな色を帯びていた。一応、出撃に備えている為に強化装備も着ていたが出番はなく、日本帝国軍・中東派遣部隊・ライノ中隊所属の鈴風・綾音少尉はまだ機械音の残る格納庫内を歩き、自分の戦術機の前で立ち止まると溜息を吐いてしまう。

その光景を目撃した整備員の一人が申し訳なさそうに声を掛けてくる。

「すいません。あと少しで出撃に間に合っただんですが……」

ポリポリと頬を搔く仕草をして格納庫に残った一機の不知火を見上げる。1か月前に行った欧州連合・ガラム中隊との実戦形式の演習やその後に発生したBETAとの戦闘などにより修理が間に合わず、今回の出撃に間に合わなかったのだ。

それに戦術機の部品不足も深刻化してきた事もあって不知火の完全修理も難しくなっていた。それに内密に横流しされてきた部品も日本帝国内で不知火が普及してきた事もあって部品不足に拍車を掛けていた。

しかしライノ中隊にとっては自分たちの祖国がそれで助かるのであれば、それもやむなしと言った思いもある。その為にライノ1や整備班長、中隊のお目付け役の帝国陸軍の高官が中東連合及びアフリカ連合に共有できる戦術機部品などの取り引きを行い、部品不足であったライノ中隊の不知火を運用してきた。

その中でも米国製の戦術機部品を多く組み込んだ第一号の不知火に選ばれたのが綾音の不知火であった。

「あ、いえ、戦闘で壊したのは私なんですし、整備員さん達が一生懸命に仕事をしているのは十分に分かっていますから、気にしないでください」

そう言つて綾音は作り笑いを浮かべる。あまり人付き合いが良くないのでライノ6こと浅倉・千里にもつと愛想よくしなさいと言われて最近では笑顔で応対するようになった。

1か月ほど前に行われた演習試合でのガラム中隊所属のミランダ・アルセイフ少尉と共に行った罰ゲームのお蔭でそれからは整備員達やそれを目撃したスエズ基地の人々から向けられる視線が生易しくなった気がしていた。

部品の横流し品で補填した綾音の不知火は米国製の部品などを組み込んだ事で最終調整などに戸惑い、今回の出撃に間に合わなかった理由でもある。先ほど話していた整備員のインカムに情報が入り、再び綾音に視線を向けると。

「あ、はい。了解です——鈴風少尉、先ほど電気系統の調整が終わったそうなので、機体との同期チェックの方をお願いできますか？」

手にしていたファイルから数枚の紙束を綾音に渡す。そこには今回の修理で使用された部品類の詳しいデータが記載されていた。それから数十分後、自分の不知火の最終チェックを終えた綾音の元にとある命令が下されるのであった。

赤塵の旋風 ②

薄らと砂塵の舞う空の下、4機の戦術機が荒地を滑走していく。先頭を行くのはUNブルーに塗られた不知火であり、その後ろには同じくUNブルーのF-15C・イーグルが3機が左右に揺れる不安定な挙動で続いていた。

その姿を確認しつつも臨時で戦術機小隊の1番機を任された綾音は内心、溜息を吐いてしまう。

(どうして私が新人のお守りなんて任されたんだろうか……)

網膜投影に映るイーグルの挙動を見る限り、主機出力に振り回されている事が判り、機体に乗りなれていない事が誰の目にも明らかであった。

跳躍との間に大地を蹴って、脚力と跳躍ユニットの噴射タイミングを合わせて行うショートジャンプですらまだまだ無駄の大きい跳躍であり、新兵の練度の低さに不安しか残らない。

それでも遅れずに付いて来れるのは強力な跳躍ユニットを持った米国製戦術機の優秀さを示していた。

今、綾音たちが現在居るのは未だにBETA群との迎撃行動が続けられる戦場であり、未だに10数km先では戦闘が継続している。

格納庫で機体の調整の為に待機中だった綾音に突如として下された命令。

——それはアフリカ連合軍に配属されたばかりの新米衛士3人を連れて戦場慣れをさせる為にその先導役&護衛役として指名されたのだった。

本来なら中隊を指揮するライノ1や中隊の管理運営を行っている総括役などを通じて、お互いのスケジュールなど、どういった戦況状況で行うか、などを念密に話し合いをするのだが、それら全てを戦術機越しの簡素なブリーフィングで済まされてしまったのだった。

その安易な対応に憤慨した綾音はブリーフィング終了と同時にそ

の指令を受諾した総括役の上官に対し明らかに苛立ちを込めた言葉で『どういう事なんですか?』と問うと向こう側も眉を顰めた表情で綾音に事情を説明した。

——聞かされた話を要約すると、新米衛士の3人はアフリカ連合軍の政府高官の息子たちであり、本来ならまだ前線に出るレベルではないのだが、自慢の息子たちにいち早く戦場の空気を味わってほしくて、その経験をさせてほしいという計らいという事らしい。

その話を聞いた瞬間、綾音は呆れた表情を浮かべると思わず言葉を吐き出す。

「……私は子供の預り所ではないんですよ。そもそも私1人で3人の面倒をみるなんて……能天気すぎます」

と、愚痴つたのを思い出しながら何度か目のショートジャンプを終えて、センサーに感があり、耳を澄ます。

未だに続く前線からは轟く爆発音や砲撃音が聞こえ、綾音の操る不知火は即座に周囲の安全を確認する。そして次に新米の3人に声を掛けた。

「このあたりが接敵警戒範囲です。これ以上進むとBETAの奇襲に何時出くわすか判りませんので、この辺りで待機しますが、周囲の警戒は厳に……各センサーには目を配っておいてください」

一応、任されているという事で軽い命令を下すも、自分には合っていないかと思いつつながら必要最低限のマナーを守り、新人衛士3人に接する事にした。

回線には新人衛士3人の表情が映り、どうも綾音の下した命令に不満なのか何とも言えない表情をみるとその中の1人が代表して綾音に意見具申を求めて発言の許可を求めてきた。

画面越しに漂ってくる嫌な雰囲気を感じながら綾音は発言を許可した。

「鈴風少尉ッ！ もう目と鼻の先は最前線ではありませんか！ 味方が生死を賭けて戦っているのに我々がこんな所で見守るのは……我慢なりませんッ！」

「もう少しなら近づいても問題なのは、センサーには何もありません……問題ないのでは？」

「ふ、二人とも。初出撃だし、安全にいきましょう……はあ……緊張で吐きそうだ」

各々に発言し、その間に綾音は口を挟まずに聞いていたが、最後にリーダー格の新人衛士が叫ぶ。

「アフリカ連合の政府外交官の息子と言われ続けて、ぬるま湯な対応に苛立ちつつも怠らず訓練に励み、自分たちは実力で衛士となりましたッ！ 鈴風少尉、ここまで来て我々は止まれないのです」

その心意気に思わず綾音は言葉を失う——もちろん、悪い意味で

こういった自己主張が強い思考の人間はチーム内での輪を乱す可能性があり、何かと指摘して自分の手柄を得ようとするからだ。

もし、ここで何が起きても自分の責任が発生しなければ、綾音は命令を放棄し、「ご自由にどうぞ」と言ってしまう。が、それではアフリカ戦線で行っている自分達ライノ中隊の活動にも支障をきたす心配がある。

なので、非常に面倒ではあるが、自分の気持ちをグツと押し込んで綾音は戦術マップを開くと、説得する為に説明を行おうとする。

「その志は大変結構ですが、しかしながらあなた方は今日が初の実戦、不慣れた機体で——」

慣れない指揮で言葉を巡らせながら答えようとする綾音が言いかけたその際だった。

「ッっ!？」

突如として機体を揺らすほどに激しい振動が4人を襲う。

「なっ、何なんだッ!？」

「うわあああ、だ、大地が、揺れる」

「く、どういう事なんだ!？ まさか、これって!!」

3人が各々違う反応を示す中、綾音はこれまでの経験で察したようですぐさま思考を切り替えると戦闘態勢を整えると動揺している3人に綾音が命令を下す。

「各機！ 耐震センサーの感度を最大に設定し、低空飛行で跳躍を開始します……まだ幾ばくかの猶予はありますが、3人とも覚悟を決めてください」

そう告げた瞬間、3人の視線が綾音に集まる。3者三様の視線を受け止めると綾音は応えた。

「BETAが来ます。各機、兵装ロックを解除して戦闘態勢を——大丈夫ですか？ もし覚悟がないのであれば、ここでスエズに引き返してください……この場所には私たちがいませんし、今は私が現場指揮官として責任を持ちますので、覚悟のある人だけついて来て下さい」

その言葉を告げた瞬間、3人中2人はすぐに頷き、1人は言葉に詰まらずも頷く。その反応を確かめた綾音は3人の新人衛士に命令を告げた。

「わかった……では全機、私に続いて、跳躍開始ッ！」

「了解ッ!!」

そうして綾音の不知火を先頭に4機の戦術機が震動が起きた先へと向かう。その先の空は赤薄く風がまっているのであった。

赤塵の旋風 ③

本来なら自己判断ではなく、司令本部にすぐさま作戦の中止を打診し、地中進行をしてきた新たなBETA群の進行方向に熟練の衛士で構成された戦術機部隊を派遣すべきであり、新人の衛士を含めた綾音たちは出てきたBETAの数などを観測するのがベストだったのだろうが、ここでいくつかの問題が発生したのだった。

一つ、BETAの出現ポイントに砂嵐が発生した事、乾燥・砂漠地帯では日常の如く起きる砂嵐なのだが、この地域には対レーザー属種に対して使うレーザー弾頭（通称・AL弾）に含まれる重金属が砂嵐によって空中上に舞い上がり、その一帯の通信が不具合が発生した事。

二つ、綾音が指揮していた部隊の衛士が新米だった為に初めて戦場に出た事によって気分がハイになってことで自己判断で行動してしまった事。そして――

現場に到着したと同時に砂嵐に巻き込まれた綾音たちは視界不良の中でBETAとの遭遇戦に陥ってしまったのだった。この地域は大部分が荒野と砂漠が広がる場所であり、人類側にも悪条件が多く、BETAにもその影響があるのか、この地域のBETAにおける地中進行は主に戦車級・要撃級が主であり、どうも地中を坑道を広く作れないらしく、出てくる種が限定されているらしい。

視界不良の中で通信も上手くできず、スエズ防衛線との距離が近い為、進行するBETAを見逃す事が出来ない。なので現場の判断で綾音は新米衛士3人を率いてBETA群の迎撃を行う事になった。何とか距離を保ちながら突撃砲での迎撃なら新米衛士でも問題は少ないだろうと綾音は考えて、3人に指示を飛ばす。

戦術機のセンサーを介して、網膜投影に映し出されるBETAの姿に次々と36mmを撃ちこんでいく。だが、次第に激しさを増す砂嵐の

中で射撃精度が低下し、キルスピードが落ちてくる。

すると次第に綾音たちとBETAとの距離が次第に詰まってくるのに新米衛士たちの中では次第に焦りと恐怖が込み上げてきた。

そして、三つ目の問題。上手く砲撃が当たらなくなった事に苛立ち、それまで適正な距離で射撃していた新米衛士たちが突如として前進を開始したのだった。

「くそっ、砂嵐の中で上手く当たらないッ！　なら、距離を詰める！」

「死ね、死ね！　くそ野郎どもめッ!!」

「二人とも勝手に……ま、待つてくれよッ！」

リーダー格だった衛士が前進を開始した事により、他の2人もそれに続いてしまい、突如として前進を始めた3人に綾音は驚きを隠せずに思わず声を上げる。

「なッ!?　勝手に前進しないでッ！　下がちなさい!!」

その無謀な行動に瞬間的に怒りが思考を支配するも、すぐに自分の感情を抑え込むと犠牲が出る前に自分が矢面に立ち、BETAの矛先を自分に向けさせるべく綾音は距離を詰めようとして短距離跳躍を試みた際、急にエラー音が鳴り響く。

突如として鳴り響く警告音に綾音は何事!?　と思いつつすぐさま情報を確認する。

「こんな時に……異物防止フィルターにダメージって——」

刹那に思考をフル回転し、原因を突き止めようとした瞬間、強い突風と共に機体全体に砂粒が叩きつけられる音がなった瞬間、綾音はハッとす。この砂嵐の中に含まれている物質、その正体が思いつくと同時に綾音が叫ぶ。

「全機ッ、跳躍ユニットの使用は禁ずるッ!!　今すぐに歩行による後退を!!——」

無意味に詰めてしまった3機は戦車級の物量から距離を空けようとして跳躍ユニットを使用する瞬間に綾音のその叫びに何とか反応した2人はハツとして跳躍を止めるも、1機だけが思わず跳躍ユニットを使用してしまう。

ロケット推進からジェット推進に切り替わった瞬間、砂嵐の中に混じっている多量の『重金属』が跳躍ユニットの空気流入口、噴射口に集まった瞬間、ジェット推進の高温によって重金属や細かい砂がガラス化して、エンジンストールを引き起こしたのだった。

機体の安全装置が働き、爆発する事はなかったが跳躍ユニットからは黒煙が吹き上がり、墜落するイーグルに狙いを絞り戦車級が飛び掛かっていく。他の2機は自分の身を守る事で手一杯であり、綾音は飛び掛かっていく戦車級にフルオートで射撃を行う。次々に戦車級を仕留めていくが、如何せん前進してしまった事で出現口に近付いてしまった為に次々とBETAが這い上がってくる。

視界不良の中、明確な数は把握できず、混乱する新米衛士たちにすぐさま綾音は指示を飛ばす。

「各機、落ち着いて態勢を立て直して！ 近すぎる戦車級には短刀での処理も！」

必死に抵抗していたが倒れたイーグルに次々と戦車級が殺到して、機体に取り付く。数秒で機体ステータスが真っ赤に染まり、機体の自由が奪われていく中でバキバキと機体の装甲や内部構造が噛み砕かれていく音が管制ユニット内にいる衛士の心をへし折っていく。

その音は自分が機体ごと喰われる事を想像してしまふには充分すぎるぐらいに現実感を突き詰めてしまっていた。冷静な判断ができず思わず恐怖で叫びながら、緊急脱出ボタンを押してしまう。

それは臨時の部隊長である綾音に即座に通知されると同時に綾音は叫ぶ。

「まだ早いッ！ 今、脱出は駄目ッ!!」

「——えっ!?!」

すでにボタンを押し、二重チェックの了承を行ってしまった後で新米衛士は綾音の悲痛な叫びに瞳を丸くする。その網膜投影に映し出された綾音の表情が彼が見た最後の人の姿であった。

次の瞬間には機体から勢いよく管制ユニットが打ち出される。空

気の流れと砂粒が顔に当たるのを感じて、脱出した衛士はBETAに機体ごと喰われる事なく脱出できた安堵感からホッと表情が緩む――と、同時に自分の姿に影が覆う。

脱出した衛士はその刹那、悟るのであった。自分が最悪な選択肢を選んではしまった事を……自分の身体を捉えようとする異様な赤黒い腕や手が伸びてきた瞬間、たまらず悲鳴を上げた。

『その瞬間』を目撃してしまう綾音はすぐさま突撃砲の銃口を落ちてくる管制ユニットに向ける。揺らぐ瞳の光が120mm弾を選択した映像を映し出す。そして綾音はトリガーを引いた。

刹那、120mm弾が直撃して管制ユニットが爆発する映像の中で腕や脚が引き千切れていく人の姿が複数の戦車級と共に映し出された。一人の犠牲を出してしまった事に綾音の心に亀裂が奔るも、次には他2人をどうするかを優先して次の行動を選択する。

他の2機は何とか態勢を立て直しているものの、機体には損傷があり、主脚による歩行が出来そうであるが何時まで持つかは判らない。

「各機、機体状況を報告！」

「こちら2番機、左腕の動作不良、センサー類に異状ありッ！」

「よ、4番機、こちらは跳躍ユニットが使用不能」

「……了解した。2人は私の後ろに下がって、近づいてくる敵を確実に仕留めて。私が前に出て、BETAを引き付けるから……いい？」

私への援護射撃なんて考えないで、2人は自分の身の安全だけを考えて」

そう告げると左腕に突撃砲を持ち構えて、右肩部の兵装マウントから使い慣れた74式近接長刀を手にする。

100m先も砂嵐で見えない状況化でもBETAは自分達の居る位置へ向かい、突撃をしてくる。

「くそッ、さつきから纏わり付きやがって!!」

2番機のイーグルが愚痴りながらも一匹ずつ確実に仕留めていく。4番機は先ほどから落ち着きがないよう周囲に気を張っているの

だがその所為で動きが固い。

「鈴風少尉ッ！ 周囲をBETAに囲まれているようです！ そこらかしこに——!!」

声色に恐怖を感じさせる4番機に綾音は叱咤を込めた指示を飛ばす。

「お互いに背中合わせでお互いの死角を減らして応戦ッ！ ここからは持久戦になるから踏ん張って!!」

そう言いながら長刀を振るう。戦車級を一刀両断すると左手で使っていた突撃砲を左肩部に懸架して、変わりに短刀を装備する。不知火の周囲には切り裂かれた死骸が散乱して歩行での回避を難しくしている。

更に視界不良でBETA出現口が見えないので規模が掴めず、終わりの見えない事が綾音たちの気力を奪っていくのであった。

赤塵の旋風 ④

戦闘開始から10分ほど経過していないのだが、戦っている綾音たちの体感的には一時間以上戦っているような疲労感が身体を蝕んでいく。

視界不良もそうだが、特に回避運動を行う際に機体の歩行と重心移動のみで行わなくてはならない枷を掛けられている為、視界に映る敵の動きにより気を張っていなくてはならない。砂嵐の中での戦闘という特殊な環境で一瞬の隙が命取りとなる。

特にこれが初戦闘である新米衛士の二人には耐えがたい疲労と緊張感で神経を磨り潰されそうに違いない——だが、そんな状況化の中でも最初は不安しかなかった操縦も今は幾分か様になっている。正面から来るBETAの大半を綾音が受け持っている事もあって、それでもよくやってくれていると綾音は思いながら、2人に告げる。

「徐々に敵の数も減ってきているはずだから、2人とも今が踏ん張りどころ」

「くっ、り、了解……」

「はあ、はあ、わかり、ました」

視界に映る二人の表情に疲労感が滲み出ており、限界が近い事が判る。そして緊張の糸が思わぬ瞬間に解ける事になる。

先ほどからの続けざまに襲ってきたBETAのパターンが変化したのだ。砂塵の中から飛び出していた戦車級や要撃級の襲撃が止み、足音が消えるほど不気味な静寂が戦場の空気を支配する。

耳に届くのは砂嵐の騒音のみ、その間にも綾音は周囲に気を配り、他の二人も突撃砲と短刀を構えて襲撃に備えた。その状態が20秒、30秒、40秒と続く中、50秒が過ぎた所で事態が動く。

突然、4番機がBETA出現口から反対側へと急に走り出した。予期してなかった味方の行動に綾音も同僚の2番機も反応に遅れてしまふ。

「もうこんな所は、もう、嫌だああああッ!!」

不気味なぐらいの静寂さというプレッシャーが恐怖となり、4番機の衛士の精神が耐えきれずに敵前逃亡を引き起こしたのだ。元より気の弱い所もあった事と初めての实战がこんなに悪条件で、更に同僚を目の前で亡くなる光景を見たのが堪えたのか、あつという間に彼の心を擦り切ってしまったのだ。

小隊長として半人前だった綾音はそこまで部下の精神状況まで把握できなかった。

「何をやっている!? ベルージっ!? 戻れ、死にたいのかッ!?」

咄嗟に2番機が呼び止めようとするも、その制止を振り切つて4番機の姿があつという間に砂嵐の中に消え、数秒後にはリーダーからも4番機の反応が消えた。砂嵐の所為かもしれないが、もしかしたらBETAの待ち伏せにあつたかもしれない。

その反応が消えた瞬間に2番機が助けに行こうと動きだす仕事を見た綾音が動きを制すると言う。

「駄目、今から行つても彼を助ける事は出来ない!」

「な……しかしっ!!」

「これ以上、犠牲は増やせない。残念だけど……こうなつては貴方だけでも守るしかないの!」

そう言つて見つめる2番機の衛士の表情は悲痛とも歯がゆさが混じつた表情でそんな表情を見た綾音は一瞬だけ言葉に詰まらせるも、状況を判断してこれ以上の犠牲者を出す訳にはいかない。だから少しでも鼓舞するように言葉を告げる。

「せめて……今、できる事はベルーシ少尉の分まで生きて、生き残つてBETAを殺す事で供養する事よ!」

そして風切り音に混じつて、再び地響きのような足音が届くとBETAが砂嵐の中から飛び出してくる。しかもそれは散発的ではなく、息を合わせたように全方位からの一斉だった。

その反応にすぐさま綾音は思考を纏めると指示を出す。

「背中を任せる! 私の動きに合わせて前進して!!」

「な、前進つて!? こんな状況でどうするんですかっ!?」

困惑しつつも、身体が命令に従っているのか、2番機も近づかれず

の距離で追走してくる。

「このままだと罫があかない、から。BETAの出現口を120mmで封鎖して、一時的に敵の流入を止めた後に全力疾走でこの場から撤退する」

接近してきた要撃級に牽制で左手に持つ短刀を投擲する。前腕触角にて投擲された短刀を防御した瞬間、綾音の駆る不知火が一気に距離を詰めると両手持ちになった長刀で右前脚部から胴体部まで一気に切り裂いていく。

バランスを崩した要撃級の身体を踏み台にして出現口へと向かう。網膜投影に映る機体コンディションが脚部を始め、黄色く点滅している。

しかし、ここで脚を止める訳にはいかない。後ろには自分の行動を信じて必死になって付いてくる2番機の姿が映り、綾音は前に進み続ける。

——そして何度かのBETAを薙ぎ払った後、レーダーにポイントを付けた出現口までたどり着いた。

「出現口まで距離、300mツ!! 2番機、タイミング合わせツ!!
……………120mm、撃てえ!!」

不知火はガンマウントを前面に展開し、イーグルも手にしていた突撃砲でマガジン内のありったけの120mm砲弾を撃ち込む。大きな音と共に出現口の出口が崩れ、濃い砂煙が2機を包み込む。

「やったっ!」

思わず喜びの声を上げる2番機、それとは反対に綾音は咄嗟に背後を振り向く。イーグルの背後に幾つもの黒い影が今にも襲い掛かるうとしているのだ。跳躍ユニットが使えない今の状況ではたった数十メートルも遠い。そして綾音の目の前で2番機が戦車級の群れに飲み込まれそうになる。

「こ、こんな所で! 死んで、たまるかよおおおツ!!」

何とか反応しつつも36mmを撃ちながら右腕を薙ぎ払うも数匹の戦車級しか撃ち殺せず、取りつかれると同時に関節部を始め、無作為に装甲が喰い千切られていくと機体の姿勢が保てず背中から倒れこ

む。

一斉に警告音と機体ステータスが真っ赤に染まり、緊急脱出の警告が2番機の衛士の頭を駆け巡る。外部センサーもやられた為に網膜投影に外部映像が映らなくなり、薄暗い管制ユニット内が肉眼に映る。

その間にもガリガリと機体が喰われていく音が響き、脳裏に過るのは同じような状態になって脱出した3番機の衛士の姿だった。

その映像と共に綾音がその時に言った言葉が脳裏を過り、脱出装置のボタンを押すのを躊躇う。しかし2番機の衛士にはもう10秒も耐えられる神経がなかった。恐怖で叫びそうになった瞬間、網膜投影に綾音の姿と声が届く。

「ッ！ 絶対に何とかするからッ！ 私が合図したら機体を捨てて、外に脱出してッ!!」

その言葉に思わず目を丸くして信じられないといった様相で2番機の衛士は叫ぶ。

「こんな状況化で脱出なんて……正気ですか!？」

その言葉に綾音は機体を必死にコントロールしながら、正気を失いそうになりながら自分の言葉を待つ2番機の衛士の瞳を見つめて、自分の思いを込めて伝えた。

「もう、誰も死なせないッ！ 何とかするから、だから……今だけでもいい、私を、私を信じてッ!」

次の瞬間、銃撃音と斬撃音が同時に伝わり、激しい振動と共に先ほどまで聞こえていた戦車級の咀嚼音が遠のく。

「——今ッ!!」

綾音の合図と共に決心した2番機の衛士は胸部ブロックのハッチを開くと——

「ううわわあああああああああああ!!」

大声を上げて思いきって飛び出す。刹那、彼の視界を覆うのは全面の黒であった……思わず腕を掲げて視界を塞ぐ。もう駄目だと思つて死を覚悟した。

——だが、次に襲つたのは衝撃と反動によって自分の口から洩れ

た苦痛の吐息だった。えっ!? と驚いた瞬間に動く自分の四肢にがある事に驚きつつ、同時に隙間から光が漏れだすのが判った。思わず見上げるとそこには砂嵐の中、長い黒髪が靡きながら管制ユニットから身を乗り出して腕を伸ばす綾音の姿だった。

「ッ！　じ、時間がないッ！　早く来てッ!!」

焦燥感の滲む綾音の表情に自分が今、どのような状況に置かれているかなど冷静に考える思考はなく、生き残りたいという感情で綾音の手を取る。

背後で音がなつたと思うが振り向くことはせずには不知火の管制ユニットに飛び込む。次の瞬間には先ほどまで二番機の衛士が乗っていた不知火の左手に戦車級が張り付いており、指先がもぎ取られる。

綾音は衛士を収納した後、数秒の間で素早くシステムを再起動させると不知火の左手に纏わりついていた戦車級ごと左手を長刀で切り落とすのであった。

不知火に飛び込んだ衛士が次に目の覚ました時、自分がまだ生きている事に驚きつつ、今、どのような状態にいるのか理解できなかった。真つ先に感じたのは鼻先に当たる硬い物と両頬に当たるフニャツとした謎の感触であった。

自分の状態がどうなっているのかを確かめるべく光を求めて顔を上げようとした瞬間に綾音の声が届いた。

「——今は戦闘の邪魔になるから顔は上げないで！　出来るならそのままくっ付いていてッ！」

戦術機の操作に集中したい綾音は視線を向けずに言葉で伝え、思わず二番機の衛士はどうしたらいいか判らずに振動に耐えるように身体を固定するかのように力を込めてしがみ付くように抱きしめてしまう。すると今度は熱が籠った声で綾音が再度、注意する。

「あ、あ、あんまり……強くは止めて欲しい、かも」

そしてここで二番機の衛士がハツとする。今、自分が抱きしめた物も、今、自分がどんな状態なのかも——今、自分が綾音の胸に頭を埋めて、彼女の腰に腕を回して抱きしめてしまったという事実

に一体どうしたらいいのか!?」と思ってしまうも先ほど綾音からそのままの姿勢でジツとしていて、という言葉思い出し、自分の色々な感情を抑え込んでとりあえずジツとしておく事にした。

この歳になって赤子のように女性に抱きつく事になるとは思っていなかったのも、その羞恥で恥ずかしくなってしまうものの、その一方では何処か心に安らぎすら覚えてしまっていたのだった。

異性が自分の身体に抱きつくような事は殆ど経験はなく、本音を言えば動揺を隠せなかった綾音だったが、何度か呼吸を整えて吐息と共に羞恥の気持ちを一緒に吐き出す。幸い、不知火は左手を失ったぐらいで戦闘継続は可能なレベルである。

出現口を潰したことで襲撃するBETAもその数を減らしているが、機体自体はボロボロで極力、戦闘は回避しつつ、脚部での移動で後退を開始しつつも、足元に広がるBETAの死骸に足を取られそうになる。

未だに側面や前方から逃がさないようにBETAが迫ってくるも跳躍ユニットを使用しない限りBETAを振りほどくことは出来ない。背部ガンマウントを後ろから来るBETAに対応させ、右手に持った長刀で正面及び側面からの襲撃に備える。

しかし、左手が使えない為に左側の襲撃には一度、動きを止めて対処しなくてはならない為に相対的に距離を稼ぐ事が出来ずにいた。突撃砲は120mmは残弾は無く、36mmも500発を切っている。更に機体の状態も防塵装備をしているとしても細かい粒子状の砂粒が機体を蝕んでいった。

右手に持つ長刀も耐久限界が近く、脚部も酷使しているので足元の踏ん張りに違和感を覚えていた——そして次の動きに転じようとした時に急に機体の重心がぶれる。すぐさま綾音は立て直しを図ろうとするも荒地や損耗した脚部ではまるで氷の上の上にいるような感覚になってしまい、コントローラを失ってしまった。

「ッ、衝撃にそなえ——」

自分に抱きつく衛士に声を掛けると同時に不知火が大地に転がる。激しい振動と共に警告音が鳴り、機体に次々と振動が奔る。これは戦車級が機体に取り付いた事を知らせる音であり衛士にとって恐怖ではない。自分の胸元で震える二番機の衛士に綾音は視線を向けると言葉を掛ける。

「少し、ううん……激しく揺れるから、しっかりと抱きついていてね」
そう言った瞬間に二番機の衛士と視線が合った事に気づいた綾音はわずかに微笑む。その微笑みにこんな状況なのに見惚れてしまいうそうになるも、何とか返事を返すと、綾音は頷いて次の行動を起こす。「あんた達に黙って喰われるほど、私は、大人しくないんだからッ！」
思わず叫んだ言葉と共に綾音は跳躍ユニットの安全装置をカットして、跳躍ユニットを点火した。大地を削るように不知火を滑らしていく。その間に機体には激しい振動が襲うと共に機体へのダメージが跳ね上がる。そしてロケット推進からジェット推進に切り替わった瞬間、綾音は即座に機体から跳躍ユニットを切り離す。

粒子状の砂粒が防塵フィルターを通り抜けて、高温の複合ジェットエンジンユニットに張り付いた瞬間に砂粒が高温に晒されると同時にガラス化し、吸気口や排気口を塞いでしまう。

そして熱が逃がす事が出来なくなつた跳躍ユニットはそのエネルギーに耐えきれずに爆発してしまった。その爆風は容赦なく不知火を吹き飛ばし、何度も荒地に機体を叩きつけられて転がっていった。張り付いていた戦車級もその爆風で吹き飛んでおり、何とか綾音たちは機体ごと喰われる事をまのがれるも、その衝撃は尋常ではなく、搭乗していた二番機の衛士はうめき声を上げた後に気絶してしまつており、綾音も一瞬だけ意識を失いそうになりつつも何とか根性で耐えるがその視界がぼやける。

そんな中、何とか操縦桿を握り締めて機体を立て直そうとするが、反応が鈍い。そこで網膜投影に映し出される機体ステータスに綾音は気付いた。

爆風で吹き飛んだ際、脚部の装甲はめくれ上がり、右足首が捻じれ

て立ち上がる事が出来なくなっていた。更に残っていた右手も肘から先が無くなっている。背部のガンマウントは動きそうにはなく、完全に戦闘不能となっていた。

「強化外骨格は——駄目か……胸部装甲が変形してハッチの解放も不可能、か」

完全に打つ手が無く、綾音は………敵を視た。まだ生きているBETAの逞しさに思わず笑いが込み上げてきそうだった。

疲労が籠った溜息を出して、乱れた前髪を払おうとした際に自分の額から出血している事に気づき、再度薄ら笑う。ふと上を見上げるといつの間にか砂嵐が止んでおり、上空には澄みきった青空が広がっていた。

「綺麗な、空……何処にいても、この空は変わらないんだなあ——」

その光景は不思議と綺麗で何とか耐えていた綾音も意識が遠のく中、最後に空に2つの黒点を見つけた。それは何かを探しているようで、どうも目標を見つけたかの如く迫ってくる。意識が遠のく中で聞こえてきた轟音と共に閉じゆく視界に一閃の閃光が迸ったのだった。

——暗い意識の中、頬に当たる風を感じて、綾音はゆつくりと目蓋を開く。管制ユニットが格納されている胸部装甲ハッチが強引に取り除かれており、外から熱風と共に腕が伸びてくる。

一瞬、戦車級か。と思われたが、それはあまりにも細く、明らかに戦車級では無い事が判り、綾音は自分に触れそうになった手を取ると口を開く。

「ここは、地獄？ それとも現実？」

その問いかけに思わず握られた手に少しだけ力が籠り、やや呆れ顔で言葉が返ってきた。

「もう……とりあえず、ここは地獄でもあり、現実でもあるよ——とりあえず、お疲れさま。綾音ちゃん」

そう告げるのは綾音が所属するライノ中隊6番機を駆り、綾音の親友である浅倉・千里のその人であった。何故？ という疑問が出ず、

綾音は胸に抱く2番機の衛士をコクピットシートへ横にすると千里の手助けを使つて機体から外へ出る。

そこは先ほどいた荒地ではなく、戦術機が何機も立ち並び、機械音や人の声が聞こえてくる。そう、ここはアフリカ大陸絶対防衛線の要であるスエズ基地であつた。

「あの状況で助かるって……何があつたの？」

端的に告げる綾音の言葉に千里はホツと胸を撫で下ろすように静かに息を吐くと返事を返す。

「私達が作戦を終えて帰投中に全周波数で救難信号を送る戦術機が居たの。いかに作戦範囲外とはいえ単機でいるなんて在りえないでしょ」

連れられて不知火を降りながら頷く綾音に笑つて答える千里が指を差す。そこには帰投してきた戦術機がハンガー入りを待つために並んでおり、ライノ中隊もその一部に混じつており、更にその中にF-15イーグルが一機混じつていた。

その姿に綾音は思わず瞳を丸くする。

「あれって……もしかして」

「だから気になつて中隊長に許可を取つて私とライノ9で向かったら、そこに居たのが、綾音ちゃんが連れて行つた4番機くんだったの」

「あ、あの子、生きて、いたの？………よかつたあ」

思わず膝から崩れ落ちそうになる綾音を咄嗟に支える千里はそつと頭を撫でて慰める。その後の話を要約すると。

あの瞬間に逃亡した4番機は運がよかつたのか、BETAの攻勢が一時的に少なくなつてきた瞬間だったらしい。多少なりとも機体は損傷したものの、砂嵐から脱出すると何とか救援要請をするためにスエズ基地方向へ戦術機で走つていた所を偶然に通りがかつたライノ中隊が傍受したという事だった。

綾音が意識を失う前に見た空に飛ぶ黒点は救助にきた千里たちであつた。

「私達が救難信号を出している戦術機に近付いて、最初の一声が仲間を助けて。だもの、状況を確認したら綾音ちゃん達が危ない状況だつ

ていうから、本当に私たちが直ぐに駆けつけられて本当によかったよ……あとで中隊長や整備班の人たちにも色々と頭を下げにいかないとね」

自分の機体から降りて、不意に綾音は自分の不知火の様子が気になって振り返る。

そこにはもう自分では立ち上がる事が出来ないほどに損傷した自分の不知火が鎮座しており、辛うじて付いている肩をライノ中隊の不知火が支えている状態であった。丁度、コクピットシートに横にしておいた2番機の衛士がタンカーに乗せられており、救急車で運ばれていた。

その瞬間に綾音の中で何かが崩れる音が聞こえ、思わず地面を見つめる。

炎天下の中でポツポツと汗が流れ落ちる様子がぼやけてよく見えなくなる。ポツポツと汗と一緒に目じりから流れていく雫を抑える事もなく、綾音は声押し殺して涙を流す。それは自分の所為で死なせてしまった新人衛士へ謝罪を込めた言葉だった。

「綾音、ちゃん……こういう時でも我慢するものじゃないのに」

「ごめん、ごめんなさい……私が、私の所為で」

「もう大丈夫だから、今は……ゆっくりと休んでね」

これまでの緊張の糸が一気に綻び、溢れだす感情を制御できない綾音をただただ労うように千里が抱きしめるのであった。

その後、今回の件について、ライノ7、鈴風・綾音の処分についてはアフリカ連合へ身柄引き渡しの事案が発生したが、その時の無理やりに押し付けたような命令や作戦など、指示を出したアフリカ連合側の傲慢が他者での事情聴取で明らかになった事もあり、国連軍のアフリカ方面軍総司令の判決により、何とか2週間の謹慎処分という形に落ち着いたのであった。

心の隙間を風ぐ、その風は ①

中東に築かれたアンバールハイヴからのBETAの進行を十数年の間、守り抜いてきたスエズ戦線。

中央アジア、中東ならび地中海方面より欧州からの難民が戦火を逃れるために決死の逃避行を繰り返して、未だにBETAの存在しないアフリカ大陸へとたどり着いた。

そして2001年現在、アフリカ大陸は今までにないほどに活気づいている。

避難してきたアジア・欧州各国への政府租借地の提供、避難民の居住先を提供して、その見返りとして人的・技術的の提供によってアフリカ大陸に最新の技術やインフラの整備が行われる結果となった。

戦争経済によってアフリカ大西洋沿岸部にそって大きく発展を遂げ、その影響は中央部や南部にも都市が発展するほどの勢いをもたらした。

ただ一部地域を除いては、その例ではなかったのだ。

そこはアフリカ北東部、アフリカ大陸にとっての生命線、その地域だけは未だに混沌と期していた。

多くの難民が集まって出来た町では未だに貧困と嘆きで溢れかえっている。

彼らの多くがスエズ運河を越えられず、アフリカ大陸に渡れなかった者たちであり、これからもアフリカへは渡れずに、そこにとどまる事になるだろう人々であった。

アフリカ連合政府による人的選別によって抱えきれなくなった人間たちの巢窟、それがスエズ郊外に広がるスラム街の現状。

国連の援助物資や近くにある欧州政府による支援によって彼らは今も生き延びる事ができていた。

2001年、5月24日、スエズ基地、第6地下格納庫。

油や火薬の臭いが香る格納庫、そこには幾つのもハンガーが点在し、現在は日本帝国中東派遣部隊、第604戦術機中隊の戦術機が格納されていた。

UNブルーに彩られている94式戦術歩行戦闘機、不知火が本日の整備点検を終えた所であった。

整備を終えた作業員たちが仕事を終えて各々の時間を過ごすべく、格納庫から出ていく。その中で整備員たちの指揮を取っていた整備班長が深めに被っていた帽子を外す。

初老を迎えるその表情は何処か不満そうで先ほど整備を終えた不知火の姿に溜息を吐いていた。その様子を察して整備班長に歳の近い整備員が言葉を掛ける。

「部品不足が徐々に深刻化してきましたね……特に装甲系と電磁伸炭素の在庫が少なくなってきましたし、このままだと共食い整備になりそうで、整備員としては機体の仕上がりを良い状態で衛士に渡せないのは悔しいですね」

そうして二人が見上げるライノ中隊が扱う不知火はすでに所々で海外製の戦術機パーツを使用しており、派遣された先であるスエズ戦線ではアフリカ連合を全面的に支援している米国のお蔭で米国製の戦術機パーツが手に入りやすかったのは運がよかったのかもしれない。

「……まあ、俺たちに出来る事をするだけだ。それにこれからはもう一機種の整備も始まるのだから、俺らが気を引き締めないと若い奴らまで引つ張られたら元もこうもない」

整備班長が向ける視線の先にはハンガーに並ぶ不知火の奥に他の戦術機が6機、ならんでいた。

まだUNブルーに塗装されておらず、新しくライノ中隊に搬入されたのはF-18E/F、通称スーパードホーネットと呼ばれる米国製の2・5世代戦術機であった。

「昨日の内に中のOSはすでに日本語に変換済みですが、衛士の機種転換訓練は近日中に始まるらしいですね。確か……最初にライノ7、

鈴風少尉からって話です」

「そうだろうな。今、自分の機体が動かせないのは鈴風の嬢ちゃんだけだろうし、ただ問題はコイツに日本式の近接格闘戦が出来るかどうかだな」

そう言つて再度、整備班長がスーパーホーネットに視線を向けた。米国製の戦術機らしい堅牢なフォルム、空力機能を備えた不知火などとは違う毛色を持つ。

「スペックを参考にすれば、米国海兵隊が使用している機体で、うちの中隊の戦術機運用が似ているからって事でうちの中隊長が選んだから、間違えはないと信じるしかないな」

帽子を被り直し、整備班長は今日の仕事を終えて、格納庫を後にした。

翌日、スエズ基地内、総合病院にて。

幾人の医者や看護師とすれ違いつつ、片手に書類を持って女性衛士が個室の病室へと向かっていく。目的の病室にたどり着くとドアを軽くノックすると中から、どうぞ。と大人しげな声が聞こえたのでドアを開けて入室する。

このご時世で病室の個室を使えるのは身分の高い者や戦闘で戦果を示した者など、特別な事情があつて使用できるぐらいに贅沢な事であつた。

そんな贅沢な個室にぼんやりとしている一人の女性に声を掛けた。「もう具合は良いみたいだね。どう？　こんなフカフカのベッドで横になるのは、懐かしいんじゃない？」

にこやかな笑みを浮かべて言う女性衛士、ライノ中隊6番機を預かる浅倉・千里少尉は備え付けられているパイプ椅子に座る。

「……最初の1日ぐらいは気分よく横になっていたけど、正直、もう起きて身体を動かしたい気持ち、もうベッドから抜け出したい」

そう退屈そうに視線を向けるのは現在、負傷中で、謹慎期間中でもあるライノ中隊7番機を預かる鈴風・綾音少尉であつた。

その不満そうな表情を浮かべる綾音に苦笑を浮かべる千里は口を開く。

「謹慎中だからね〜でも、運がよかったんじゃない？ 私たちが普段使っている宿舎よりの個室よりも広いし、綺麗だし、今ぐらいはゆっくりしても？」

幼馴染でもあり部隊内でも相棒でもある千里の言葉を遮るように綾音が口を開く。

「でも1週間近く、ここに缶詰め状態なんだよ？ 身体が鈍って仕方ないし、部隊の皆はきても茶化したりで何だか見世物にされている感じ」

むくれた表情を見せる綾音を見て、クスツと笑う千里は持つてきていたファイルを綾音に差し出す。お見舞いの品としては似遣わない物を手にして、綾音はファイルの表紙を捲ると、そこには戦術機の三面図と共に各スペック表が記されていた。

描かれている戦術機は米国製の第2世代機、ただアフリカに来て見た事もない機体であったので綾音は頭にクエツションマークが浮かぶも、機体の特徴などを頭に入れていく。

「こんな物を持つてくるって事は次に私が乗る戦術機って、これ？」

「うん、そうらしいよ。不知火は予備パーツ、特に外装パーツが足りなくなる可能性があるから迂闊には使えないし、中隊長がスエズ基地の本部に打診したらしいよ。それで来たのがこのスーパーホーネットっていう戦術機、もうハンガーに搬送済みで6機も来たんだよ」

その言葉を耳にしつつ、綾音はスーパーホーネットの採用年数を見て、疑問を感じた。

「でも、この戦術機ってここ数年で配備されている……俗にいう新型機じゃない？ それも6機も配備って、私達みたいな外国の派遣部隊に補充されるなんて変じゃない？」

発言した疑問は当然であり、アフリカ戦線では徐々に第二世代機が配備されつつあるも、戦術機部隊の大半は第一世代のF-4ファントムそれに属するシリーズが配備されている。

第二世代機であるスーパーホーネットなどの機体は何処の戦場で

も求められている機体だ。

当然、乗りこなす為に慣熟訓練や機種転換訓練なども必要であるが、乗りこなせれば反応速度や機体自体の完成度は第二世代機のが上である。

その分、一機あたりの機体コストも高く、馬鹿にならない為に最前线にまで行き渡らないのが現状であった。

綾音たちも不知火に乗る前は第一世代機のF-4J撃震、ファントムを日本帝国仕様に改修されたものを使っていた為に、初めて不知火に乗った時に感じた操作性の違いなどに戸惑いはあったものの、慣れれば自分の身体のように動く不知火には感動すら覚えたものであった。

未だに戦力の多くが第一世代機で補っているスエズ戦線でライノ中隊に第二世代機が支給される疑問に千里が答える。

「前回の任務で綾音ちゃんが一緒に戦った新人衛士、ライール・ルマアサル少尉、ベルーシ・ルカツセル少尉、この両衛士の親がフリカ連合軍の政府軍事部門の関係者って事は綾音ちゃんも聞いていたよね？」

「うん、オペレーターからは絶対に護れ、って話は聞いていたし、軍関係者って事はそれなりに上の役職の子だったの？ 詳しい話は訊いては無かったから」

「えっと、どうも二人とも……特にルマアサル少尉は父親がどうも、フリカ連合軍の軍事輸入部門、特に戦術機関連を主に担当しているらしくて、今回、私達にスーパーホーネットが配備されたのも、それが理由らしいよ。」

機種はうちの中隊長が選んだらしいけど……そういう事でその人が色々と融通を利かせてくれたんだって」

ポケットに持っていた飲み物を取り出して、渴いた喉を潤して千里は一息つく。不意に見る綾音は少し顔色はよろしくない。どうもあの戦闘で一人の犠牲者を出してしまった事に気を病んでいるのだろ

う。

そんな戦友の表情を見て、千里は手にしていた飲み物を飲み干すと。

「気にし過ぎはよくないよ。あと人の好意は素直に受け取った方がいいし、それに今は不知火だつて予備パーツが足りなくなつて、部隊で使用する新しい機体を導入しようとしていた所だったから經理の人や中隊長は『ただで機体が入る』って嬉しがっていたよ」

そう言いながら中隊長のライノ1の口調を真似して言うが似せようともしない千里を見て、ようやく綾音がクスツと笑みを浮かべると。

「そう、だったら、いいんだけどね」

手にしていたファイルを一旦閉じると、綾音は千里との会話に耳を傾けるのであった。

それから一週間後——スエズ基地、第6地下格納庫。

整備員休憩室となつている大部屋に何名の整備員たちが寝転んでいる。その上から毛布を掛けていく千里と整備班長の姿を横目に綾音は久しぶりに立つ格納庫の空気に懐かしさを感じつつ、目の前に立つ戦術機に視線を向ける。

国連軍を示す水色に塗り替えられたスーパーホーネット、綾音が乗る為に用意された機体が待機していた。

綾音の周りには整備班長ほかに数名の整備員たちが集まつて、今日の為に仕上げた機体を眺めている。本来なら休憩室で寝転んでいた者たちもこの日に間に合わす為に完成まで頑張つた結果だった。

「今回、仕上げされてもらったコイツはまだ慣熟訓練を終えてない機体だ。だから無茶だけはしないでくれよ。嬢ちゃんだつて復帰直後で病院戻りは嫌だろ」

「はい、出来るだけ無傷な状態で戻ってきます」

真新しい管制ユニットのシートに座り、コントロールグリップを握る。癖が全くないグリップは硬く違和感を覚えつつも、機体のシステムを起動させる。

網膜投影に機体情報が次々と映し出され、OSを英語表記から日本語表記に変わっている為に機体コンディションチェックを早々に終わらせ、異常のない事を確認する。

機体の駆動音と共にハンガーロックを解除すると、整備員達が退避していく、綾音はゆっくりと機体を進ませていった。

心の隙間を風ぐ、その風は ②

焼け付く日差しと共にスーパーホーネットの姿を見ているライノ中隊のメンバーたちは指揮車両やテントの下に置かれたパイプ椅子に座って見守っている。

「あの機体、元のフォルムとは違うけど、あれってどうなんです？ 俺ら向けに改修したんでしょ」

そう告げるのはいつもライノ7に悪態をつく姿が部隊内でも目に付く、ライノ9であった。だが、その指摘は衛士のものらしく、すぐに機体の特徴を捉えていた。

今、綾音が操縦しているスーパーホーネットは単純に機体のOSなどを微調整しただけではなく、日本戦術機などが応用している装甲面における空力制御を行う為に頭部にはセンサー内蔵型のブレードアンテナ、腕部には不知火に装備されている展開型のナイフシースを備えて、各部の電磁伸炭素も近接格闘戦仕様に調整されていた。

ライノ9の言葉に答えたのはインカムを付けてライノ7と機体の調子をモニタリングしているライノ3であった。彼は眼鏡を掛け直すとコンソールを操作して言う。

「そうですね。本来の機体とは多少なりとも仕様が変わっている事ですし、整備員やライノ1が話した結果、うちで扱うスーパーホーネットは日本帝国軍仕様ということで、コードネームを『瑞雲』と呼称する事になりました」

「瑞雲？」

初めて聞く名称にライノ9やそのバディでもあるライノ8も首を傾げる。その様子にライノ3の横で機体データを見ていた整備副長が二人に向けて説明した。

「大東亜共栄圏の時に帝国が開発した水上機が名前の由来だよ。水上に浮かぶようにフロートが付いている飛行機で、スーパーホーネットも両脚の兵装ブロックがフロートのように突き出しているし、同じ海軍での使用という共通点があったから、そうしたらしい。」

いつまでも横文字で戦術機の名前を呼んでいると舌を噛みそうになるからな」

「そっちの方が俺らにとっても馴染みやすいか」

納得したのかライノ9が再びモニターに視線を向けると甲高い音が鳴り響き、周囲に突風が吹き荒れる。

「こちらライノ7。これより瑞雲の動作トリアル及び戦闘機動を行います」

「了解だ。データ関係は逐一記録しているから、何か問題があるなら直ぐに報告してくれ。次のテストまでには調整する」

整備副長の言葉に綾音は了解。と告げた後、主脚でのランを行い、跳躍ユニットを点火するとショートジャンプを行った。不知火の主機とは違う跳躍ユニットの力強さに戸惑いを覚えつつもテストコースを進んでいく。

機体のテータは頭に叩き込んでいたが、実際に動かしてみるとやはり素直にいかない。米国製の跳躍ユニットは出力が高く、機体の方向を変える際は跳躍ユニットで強引に変える。

帝国製の跳躍ユニットは全体的に出力が低い為にそれを補うために機体全体での空力性能を込みで補っている。

なので、身体に染みついていて日本仕立ての機動が上手く合わない。それはモニター越しに見るライノ中隊メンバーも整備員たちの目からも明らかであった。

「おいおい、バツタみたいに飛び跳ねて、上手くコントロール出来てないじゃねーか」

思わず素直な感想を述べるライノ9は皮肉を込めて言う。

「あれがうちの突撃前衛だとは他の隊のやつらには言えねーな。まったく」

流石にと思ったのか隣にいたライノ8が訝しめな目つきで咎める。

「お前は……鈴風少尉だって病み上がりで慣れていない機体を動かしているんだ。その辺は考えてやれ」

その言葉にライノ9は鼻で笑い、その態度にライノ8はため息をついた。その間にもトリアルは続いており、一通りのコースを辿った

が前に不知火で出したタイムとは8秒以上も差が出ており、なんとも言えない結果となった。

網膜投影に映し出されているタイムを見て、綾音は思わず操縦桿を握る手に力が入る。

情けない。とその一文字だけが脳裏を過ぎる。瑞雲という戦術機の性能が悪い訳ではない、跳躍ユニットだけでもみたら不知火よりも出力が高く、機体自体も整備員たちが綾音が乗っていた不知火に近い操縦性にしてあるのは乗っついていて判る。

だからこそ自分の腕が鈍っている事に情けなかった。

「少尉、こちらはライノ1だ。どうだ？ 少し休憩でも入れるか？

慣れない機体の操縦だ——」

そのライノ1の気遣いを遮るように綾音が答える。

「いいえ、もう一度……お願いします。次はもつと速いタイムを出してみせます！」

網膜投影に映し出されるライノ1を綾音は喰らい付くような瞳で見つめる。それを見たライノ1は綾音に注意を込めた言葉でいう。

「……おう、分かった。でもな鈴風、今日は初日だぞ？ 病み上がりのお前が壊れても駄目だし、機体が壊れても駄目だ。つまり俺が言いたい事は分かるよな？」

何度も、何十もの戦場を生き抜いてきたライノ1が見せる眼光、綾音は当然といったように頷くと応答した。

「当たり前です。私は衛士ですから……BETAを殲滅するまでは、こんな所で負けてはいられません」

その言葉に苦笑を浮かべたライノ1は「あの時から随分変わったものだな」と一言ぼやくと。

「じゃあ少しでも早くその機体を自分のものにしてみる！ 時間も機体も全てを無駄にするな。これは命令だ!!」

「——了解ッ！」

そう告げた瞬間にライノ7が操る瑞雲が颯爽と大地を駆けていく。その一日目の結果はほんの一秒ほど記録を繰り上げた結果が残されたのだった。

心の隙間を風ぐ、その風は ③

二日目。

まだ日の上がる前だったが、スエズ基地内にある外周道路を走る人間の姿があった。後ろ髪を縛って走る彼女は汗を浮かばせながら体力作りと今日のトライアルの為に集中力を高めていた。

朝日が徐々に昇り始め、腰に付けたポーチから小さい水筒を取り出すと水を二口ほど飲み、火照った身体に沁みていった。

「朝食までもう一周ぐらいいは行ける、かな」

不意に視線を上げると基地全体が動き出したように人の声や機械音が聞こえ始め、朝を迎えて動き出していく中、自分と同じように早朝ランニングを行う兵士の姿がチラホラと見えており、その中に自分に手を振る姿を確認した。

綾音が不意に手を振ると、向こうも手を振って駆け寄ってきた。ようやく表情が確認できるぐらいに視認すると同時に声が届いた。

聞き馴染んだその声に綾音はそれまで固まっていた表情を緩ませる。

「おはよ、ちーちゃん」

「うん、おはよう朝早いね」

ニコニコと可愛らしい笑みを浮かべる千里が手を掲げるので、綾音も釣られてハイタッチを交わすと今度は二人で走り出す。

「聞いたよ。昨日のトライアルの話。実際の所はどうなの？ やっぱり不知火の方がいい？」

「無いもの強請りしても仕方のない事だし、でも……あの不知火には色々と思いい出もあるからって気持ちだけど。瑞雲だって使いこなさないと用意してくれた皆の気持ちもあるから」

「……そっか、今日も私は見に行けないんだけど、頑張つてね。私は綾音ちゃんが出来るって信じてるからね」

「うん、ありがと。ちーちゃんは今日も『訓練校』の方に行くんだっけ？」

この数か月の間、ライノ中隊はアフリカ戦線でも珍しい近接戦闘を

多く行い、現在でも全衛士が健在という成果を残している為、派遣部隊としてはスエズ基地内でも自然と評価が高くなっていった。

それはライノ中隊のメンバーも知らず、気づいた時には周囲の視線が集まるほどであった。その中でも特に人気なのは『ライノ7番機』である。

物珍しい近接長刀での戦闘、たまに見せる二刀流でBETA群に切り込んでいく姿は若い衛士には斬新なスタイルに映り、恐れなく立ち向かう姿は心に深く刻み込まれる者も多いらしい。

それを千里が知ったのは綾音の謹慎期間中の時だったので、つい最近までは知らなかったし、当の本人は未だにその事を知らない。

面白半分といった所もあるが、綾音自体は自分が目立つ事が好きではないという事もあり、その辺は配慮して今は出来る限り自分の事、新しい戦術機の慣熟に意識を集中して欲しいという気持ちが強かったからだ。

「とりあえず任務と訓練が無い日に何回かに分けて訓練校には行く予定だよ。まさかアフリカまでに来て近接戦闘の話を訓練生や自分よりも歳が上の衛士たちにも言う日が来るとは思ってたよ。

変に緊張しちゃって、言葉遣いとかに気を使って大変だよ」

「そう考えると、ある意味で運がいいのかな？ 私だったらちーちゃんみたいに話せないと思うし」

そんな話題をしつつ、二人は仲良くランニングをする姿は忘れかけていた平和な時にあった光景を思い出させるようであった。

午前中は他の戦術機部隊が合同の訓練を行う為に綾音が行う瑞雲のトライアルは午後の14時を過ぎとなくなってしまった。

今日は動きだけではなく、突撃砲や長刀、短刀などのシステムチェックも行うために基本的な装備を搭載しての開始であった。

格納庫から演習場に向かう際に周りにいた軍人たちの視線が集まる。

米軍機が長刀を背負っている珍しい光景に訓練を終えた他の戦術

機部隊も注目を浴びる形になった。瑞雲の管制ユニット内の綾音に連絡が届く。

「まだ演習場は完全撤収という訳ではないですが、射撃演習場には機体はいないので先に突撃砲の試射を行います……ライノ7、チェツク」

「——了解。機体各部は良好、出力チェック、各部電力ユニット、跳躍ユニットも異常なし。いつでもいけます」

そう伝える綾音の視線が泳いでいた為、指令を伝えていたライノ3はそれを見逃さず、綾音が口を開く前に思っついそうな事を考えて言葉にする。

「今日は隊長も副隊長も一緒に他の作戦会議に出て不在です。他のメンバーも訓練校に行ったり、小隊での哨戒に出たりしていますね」

通信越しで見るライノ3は眼鏡を掛け直して、一言。

「だからと言って自分が暇という訳ではない。という事は理解してくださいね。一人ぐらいは戦術機の動きを見られる衛士がいなければ、不測の事態にも対応できませんので」

現在のライノ中隊のメンバーは正規が集まった訳ではない為、その中でも真面目な部類に入るライノ3は頭も回るし、周囲も見れる人として、ライノ1から重宝されている。

なぜか部隊内の経費などの手伝いをしていたり、会った当初は言葉遣いが冷たい印象を持つ人物に思われがちだったが、ちゃんと部隊の事を思っていると知ってからは内心は優しい人なのだろう。というのが今の綾音が抱く印象である。

「とにもかくも、貴女がその瑞雲を使いこなして部隊に復帰しない限り、中隊の前衛が一機足りない状態が続くのですから……って、長話が過ぎましたね。どうやら演習場も空いたらしいので、先に機動試験から始めましょう」

クリアとなった演習場に向かう為、綾音は意識を切り替えて集中する。今はこの瑞雲をいち早く自分の物にしなくてはならない。

「こちらライノ7、これより瑞雲の機動テストに向かいます」

跳躍ユニットに火が灯り、乾いた大地を轟々と駆けて行った。

武装面、87式突撃砲や74式近接長刀などの日本しきの武装は概ね問題はなかったが、どうしても機動面に不具合が出てしまった。

二日目を終えて、機体が格納庫のハンガーに固定された後に綾音と監督役のライノ3、そして整備員たちにて今回の問題点や改修案を議論しあう。

「すまないな、鈴風少尉。前の不知火のように思う通りにならなくて。ライノ中隊整備班としては情けないと思うよ」

明らかに落胆する整備員たちに綾音が慌てて頭を振るとワタワタと手を振るって否定する。

「そ、そんな事ないですよっ！ 皆さんが仕上げてくれた瑞雲を使いこなせない私の方が頭を下げるべきなんです！」

このままでは收拾が付かないと思い、その間を割り込むかのようにライノ3が口を挿む。

「自分からも一つ言わせてもらいますが、自分たちや鈴風少尉が乗ってきた不知火は長年使いこんで蓄積されたデータや挙動、その一つ一つが搭乗する衛士に合わせてコンディションを整えてもらっています。」

自分たちの不知火はまさに人馬一体、それとここ一日二日で調整中の機体と比べるのはナンセンスなのではないですか？

なので、ここでは謝罪ではなく、いち早く瑞雲の調整と話し合う方が遥かに有意義だと思いますよ」

そういつてズレた眼鏡を掛け直すライノ3に綾音と整備員たちの視線が集まる。その視線に気づくとわざとらしい咳について視線を逸らすと。

「ごほんっ、取り合えず自分は今日のデータを纏めてくるので少し外すので、議論や問題点が纏まったら読んでください」

「あ、あのー」

立ち去ろうとするライノ3に思わず綾音が呼び止める。いつの間にか服の裾を掴んでいたので、ガクンツと身体が揺れてから振り返るライノ3は気恥ずかしそうにして、振り返った先にいる綾音に視線を

向ける。

「ゴホンツ……何ですか？ さつきも言いましたけど、自分はこれから——」

「その……上手くは言えないんですけど」

これまで任務以外で主立って話した事はなく、どこか避けられていたと思っていたので綾音と至近距離で話すのは少しドギマギしてしまう。それに自分の方が年上で男なのだ。少しは堂々としていないとという気持ちが大きく出て、外見では冷静を装う。

改めて近くで見ると、サラサラとしている黒髪や自分よりも大きな瞳はBETAと前線で戦ってきた衛士とは思えない人柄を感じてしまいが、綾音はライノ中隊の突撃前衛なのだ。

戦闘時とは違う女性らしい、否、少女の面影が残る彼女が何かを言おうとしているのをライノ3は待った。時間にして数秒ほど待った後に綾音が口を開く。

「今日はありがとう、ごさいます。データの纏めとか隊長に報告とかしてもらって助かります」

「……別に気にする事ではありませんよ。これも自分の仕事ですし、それに今は貴女の機体を仕上げる事が最優先なのですから、その為なら自分も隊の一員なのですから

——たった二日で新しい機体を使いこなせるなんて天才みたいな人じゃない限りそうそう居ないので。とりあえず頑張ってください」

それでは。と言つてライノ3は自分の仕事をするべく、格納庫を出ていく。一礼してその後ろ姿を見送った後に綾音はハンガーに固定された瑞雲を見上げる。

「とは言え、不知火の動きに慣れ過ぎて、些細な感覚がどうも掴めないな……」

一年近く突撃前衛のポジションを預かってきた事、その重圧に耐えながら部隊全体の先鋒としてBETAの群れを切り開くという重要な事は誰が聞いても判る事で、失敗すれば自分の命だけではなく部隊全体の危機すらあり得る仕事を担ってきたのだ。

その為、戦術機……さらに言えば不知火の動きに全神経を集中して鍛練を積み重ねてきたのだ。

しかしそれが仇となり、うまい具合に自分の想像する動きと戦術機の動きが噛み合わなかったのだった。

米国製の戦術機、F4ファントムの日本帝国仕様の撃震とはまた違った挙動に手こずる自分が歯がゆい。整備士たちも一生懸命に調整してくれているなら尚更、その気持ちに応えたいのにと焦りが生まれていた。

整備士たちの擦り合わせの後、休憩を兼ねて出ようとした綾音に不意に声がかかる。整備士たちの野太い声ではなく女性の声、しかも自分と変わらない年ごろの声に綾音を顔を上げた。

「何を負のオーラ巻き散らして歩いてるの？ 貴女？」

ライノ中隊のメンバーで綾音の事を貴女という人物は居らず、綾音の瞳に映るのは毛先に癖のあるブロンドヘアが流れ、こちらを強気な態度で見つめる衛士の姿があった。

そして威風堂々と立ちはだかる衛士が指をさして告げた。

「鈴風・綾音少尉！ 明日、私に顔貸しなさい！ 話があるわ！」

そこに立っていたのは欧州連合軍・アフリカ派遣部隊。フランス陸軍ガラム中隊のミランダ・アルセイフ少尉、その人であった。

心の隙間を風ぐ、その風は ④

ミランダの言葉は耳に入ってきたが、どうして他国の衛士がここに居るのか？ やらと疑問を持つも、疲れていたり、自分のやるせなさに思わずスルーしようとする綾音の肩をミランダがグツと掴んで動きを止める。

「つて、反応しつつ無視しないで！ なんで貴女ってそういう時は堂々としているのか不思議でしょうがないわ」

自分よりも背丈が低いミランダがプンスカと効果音が付きそうな憤慨した表情をしているが、顔が整っているのでそこまで怒ったようには見えない。何となくちよっかいを掛けてみたくなる、そんな気持ちだった。

「えつと……敢えて、場の空気を読んでみた的な？」

「はあ？ そんな空気出してなんかいいわよ！ もう……いいわ。心配した私が馬鹿みたいじゃない」

あの演習以来、ミランダと気軽に会話するようになっていた。刃を切り結んだ仲というものか、スエズ基地の食堂で同席したりする。（大半がミランダ側からのアプローチであるが）

綾音が入院中にはお見舞いにも来たりと年齢も近い為か綾音や千里からも見かければ声を掛けるほどだ。

今となつてはこうやって憎まれ口すら言い合えるぐらいだ。

「全く……もう何度も話していますけど、少し素直になつて話した方がいいと思うわよ——つて、今日は貴女とお話しにきた訳じゃない、聞きましたわよ。どうやら新しい戦術機を上手く扱えないって落ち込んでいるつて」

事實は事実なのだが、後者の部分に引つ掛かりを感じて綾音は怪訝そうな表情を浮かべる。

「まだ使い熟していないっていうのは本当だけど、落ち込んではいない」

「え？ でも昨夜、食堂で千里さんと会った時に聞きましたわよ。あや……鈴風少尉が新しい戦術機の操縦に苦戦している。と、それで如

何してるだろう？　と思い様子を見に来た所ですけど、どうも本当の事だったみたいわね」

「ちーちゃん、口が軽いんだから。よりによってミラ……アルセイフ少尉に話しちゃって……」

本当は部隊外に知られたくはなかったが、わざわざこちらのトライアルが終わった頃を見計らって、足を出向いて様子を見に来たという事は今日のトライアルの様子を見られていたのかもしれない。

しかもミランダは腕の立つ衛士であり、もし見ていたのであれば機体を上手く扱えてないのは分かってしまう。それに急に誤魔化すのもここに来てくれたミランダに失礼というものだ。

「確かに私がああな戦術機、瑞雲を使いこなしていないのは事実だよ。衛士として恥ずかしいけど、不知火の癖が抜けなくて。どうしても噛み合わないんだ」

そこで苦笑いを浮かべる綾音はミランダから何か言われると覚悟していたが、ミランダは少し考えた後に綾音の瞳を見つめて語気を強めて言う。

「ねえ貴女から見て私がどのように映っているかは知らないけど、率直に一つだけ言わせてもらおうわ。各国の戦術機はそれぞれ特色はあるのは分かるわよね。」

同世代機だって運用や特性が違うのよ。今まで乗っていた戦術機みたいに動かせる訳ないじゃない。もし、貴女が前の戦術機のように……その、ズイウンっていうあんな戦術機をすぐに使いこなせると思っているなら、もう少し自分の足元を見た方がいいわよ。少し自分の事を高く見積もり過ぎではない？」

「それは……分かってる。でもあの瑞雲は米国製の戦術機を私たちでも扱いやすく日本式に仕上げてくれた戦術機なんだよ。しかも整備や調整は私の癖までを把握している人たちだし、そんな条件下の中でも私は未だに使い熟していないんだよ？」

「あ、あのね、前から思っていたけど」

内心でこみ上げる自分の気持ちを押しさえつけるとミランダは怒りを込めた視線を綾音に向ける。

「貴女は何でも自分の所為とか、不甲斐なさそうにしちやうの！　まだ3日やそこらで何を言っているの!?　貴女が前の戦術機と同じようにすぐに動かせないからって誰が困っているの！」

自分一人じゃない、周りにもっと目を向けなさいよ！　皆、知っているのよ。貴女が努力して研究して、何とかして物にしようとしてる事を皆分かっているんだよ。

時間だつて貴女の為に作ってくれているんだがら、少しぐらいその立場に甘えて、今の貴女を受け止めてあげなさいよ！」

大声で叫ぶミランダの声はいつの間にか格納庫で作業していた整備員たちの手を止めさせていた。

「……………」

頭の中で何か言わないと、そう思っていたが全くもって言葉が浮かんでこない。乾いた喉に言葉が根詰まりしたような感覚で綾音は黙り込んでしまった。

そんな綾音にミランダはそつと近づくと手を握ってくる。暖かい感触に視線を向けるとミランダはそれまでの雰囲気とは違う口調と呆れた微笑を浮かべる。

「私たち衛士がすべての戦術機を扱える訳じゃない。でもね、癖を掴めば貴女なら使いこなせるのはまだ付き合った歴が短い私でも分かる。悔しいけど、今の貴女は私よりも腕が立つ衛士だもの。」

だから特別に協力してあげるわ……明日、うちの所に来なさい。駄目とか拒否権はないからね！」

そう言い残してミランダは格納庫を後にする。通路の角を曲がるまで茫然とする綾音の事を振り返りはせずにミランダの姿が視界から消える。

その瞬間に綾音は脱力感を覚え、どうしたらいいか分からずに立ち尽くしていると、そこに整備班長や整備員たちが声を掛けた。

振り返った綾音の瞳には今にも零れ落ちそうな涙、当の本人は気づいていないようであり、顔を俯いてから頬を流れる涙に気づくと頬を擦る。

自分の意志とは反比例して止まらない涙に唇を噛んで堪えようと

する綾音の姿は男であるなら抱きしめてあげたい衝動に駆られてしまふほどであったが、その中で動じなかった整備班長が率先して綾音に言葉を投げかける。

「あのフランスの少尉さんが鈴風の嬢ちゃんの事をあれほど思っていたのは驚いたが、今はあの心意気に素直に甘えた方がいいんじゃないか？ 機体の調整だけでは出来ない事をあの少尉さんが教えてくれると俺は思うぞ」

「でも、わたし……自分でどうしたらいいか……中隊長にだって顔向け出来ない」

「嬢ちゃんの好きにしたらいい。決めるも決めないのも……鈴風少尉、あんただけだ。うちの中隊長がどう言おうが今更構う事はないさ。少なくとも今はあんたの心が如何したいか。が一番大切なんだからな」

そう言った後にくたびれた作業帽を取ると柔和な笑顔でそっと綾音の頭を撫でる。大きくてゴツゴツした職人の手だが優しく、撫でられているうちに涙が引いていくのが分かった。

「それに他の衛士の意見を取り入れることで解決の糸口が見つかるかもしれない。ライノ中隊のメンバーとは違う視線の意見は足りない何かを気づかせてくれる可能性があるんだ。

それでいい感じに瑞雲のコントロールを掴めたら中隊長にもこれまでの顔向けを纏めて出来るわけなんだしな」

「あの……整備班長、あんまり女性の髪の毛を気軽に撫でるのは、どうかと思いますよ」

そう綾音が告げるとばつの悪そうな顔つきで整備班長が、わりいなと言って苦笑を浮かべると自分の仕事に戻っていく。その後ろ姿を一瞬見送ると綾音は肺に溜っていた空気をそっと吐き出す。

自分の手よりも大きくてゴツゴツした手はまさに職人の手であり、その感覚が昔、父親に頭を撫でられた時を思い出されたのだった。

自然と口角が上がり、そっと口元を隠す。懐かしい記憶と共に少しだけ綾音の心の枷が取れた気がした。

四日目。

今日は瑞雲の調整やライノ中隊の不知火の整備も重なってトライアルは中止となった事もあり、昨日ミランダから告げられた言葉に釣られてスエズ基地の欧州連合軍の施設へと足を進めていた。

もちろん、ライノ中隊の佐山中隊長などには話してきているのだが、去り際に頑張れよ。と柔らかな笑みを浮かべていたのが気になったが、取り合えず許可も貰った事とミランダが何を企んでいるのかと思考する。

この基地に来てもう何か月か経過しているものの、他の軍施設に立ち入るのは初めてで基地内の案内板を見て、何とか到着する。多少迷ってその辺で歩いていた兵士などに道を尋ねていたのはライノ中隊のメンバーには黙っておこうと思う。

だが、入り口に到着するもゲート前には頑強そうな欧州連合軍の憲兵が立っており遙か自分よりも背の高い威圧感に人見知りな部分が出てしまった綾音。

憲兵との視線が合った瞬間、不自然にも固まってしまい――
――今、綾音は捕まって事情聴取を受ける事になったのだった。

身元引受人を待っている間、出された合成茶葉で入れられた紅茶を飲みながら待っていると誰かの走る音が聞こえ、ドアの前でピタリと止まると外で複数人の喋る声が出たと同時にドアが開かれる。

「欧州連合軍、ガラム中隊のミランダ・アルセイフ少尉です。ここに私の来客でお呼びした日本帝国軍の鈴風・綾音少尉が来ていると連絡があつて来ました」

その言葉を室内で綾音を監視していた憲兵に向けたものであった。と、視線がすぐに綾音に向けられる。明らかに面倒くさそうな視線に綾音はとりあえず紅茶を飲み干すと一言。

「ど、どうも、お疲れさま」

ミランダが堪らず深いため息を吐くとジト目で綾音を見つめると口を尖らせて言う。

「そりゃあ、私も誘った手前。ここに来いって言っておきながら指定場所を伝えてなかったのは悪かったわよ……ごめん」

ばつの悪そうなミランダに監視役の憲兵が苦笑いで告げる。

「そうですね。来客が伺うという事を前もって我々に申してくれれば、こうなる事もなかったのです。間違えば大問題になってしまう事です」

「今度から気を付けるわよ。てか、あんたも衛士ならもう少し堂々と言いなさいよ。変な所で弱弱いんだから……あんたがあの中隊の突撃前衛と思うとそれを聞いた普通の人は信じないでしょうね」

その言葉は綾音も衛士になってから身をもって痛感している事で、初対面だと衛士とも思われぬ事もしばしばだった。その言葉に綾音は笑顔を浮かべて応える。

「えへへ。でも初めて来た場所だし、その、今度は大丈夫だと思う。うん」

その笑顔は男の気を引くには十分な効果を発揮し、その場にいた数人の憲兵の気が緩むほどであった。ミランダはそんな男どもの気配に内心、呆れつつも取り合えず綾音の手を取ると素直に謝罪する。

「ごめんなさいね。もう少し私が気を遣う所だったから、今度からは気を付けるわ」

「ううん、別に気にしてないから。大丈夫……あ、あの、お世話になりました」

綾音が軽く会釈すると憲兵たちは小さく手を振って送り出したのだった。

心の隙間を風ぐ、その風は ⑤

同じ基地施設にあるとはいえ、自分たちがいるエリアとは明らかに空気が違う事に綾音は思わず周りの様子を窺ってしまう。

だが、それは逆もしかりであり……通り過ぎる欧州人は見慣れない東洋人の姿を物珍しいと思ってしまう、振り返るのは当然の反応といってもいいだろう。

前を歩くミランダは背中越しに感じる綾音の反応に少々呆れつつ、目的の場所までたどり着くとドアを開ける。

「取り合えず、あなたに紹介する人がいるから入ってくれろ？」

そう言われるがまま綾音はドアの先へ進むと、そこは幾つもの椅子や巨大なモニターが配置されているミーティングルームであった。光源の所為もありその広い空間がより一層広く見えてしまう。

そして綾音の視線がモニターの前に立つ人物の姿を見つけた。

向こうはこちらの姿を見て軽く手を振る。爽やかな笑みを浮かべるその人物は綾音も知る人物はミランダの兄であり、彼女らの所属するガラム中隊の中隊長であるアレクセイ・アルセイフ大尉であった。「ようこそ欧州連合軍へ、鈴風・綾音少尉。歓迎すると同時に色々事情はミランダから耳にしているよ。本来だったらお茶会形式で出迎えたかった所でしたが、どうも優雅にしている時間はないという事ですし……さっそく本題に入りましょうか」

長身で痩せ型、見るからに爽やかそうな人柄で喋り掛けてくるアレクセイが自然な対応だった為、人見知りの綾音も難なくその言葉に頷いて指定された席に腰を落とす。

席に座ると部屋の照明が落とされ、大型モニターに映像が映し出される。それは綾音が昨日行った瑞雲の映像であった。

アルセイフ兄妹がその映像を見終えるまで綾音が自分の稚拙な操縦技術を見られているという羞恥心で思わず俯いてしまう。

そして一通の映像を見終わり、室内に照明が灯るとミランダが綾音を見つめて口を開く。

「貴女、もう少し出来るとは思っていたのに……」

「……惜しい所までは来ているとは思いますが、感覚を掴み取れるまで時間が掛かりそうな感じですね」

二人とも眉を潜ませる表情で辛口なのは、下手にフオローされるよりもましだと綾音は思わずホツとしてしまう。

そして二人に続いて綾音が言葉を続ける。

「それは私も同じ事を感じています。あと、もう少しで何かを掴めると思うのですが、その何かが——」

綾音が答えを求めようとした時、それを言わせないかの様にミランダが人差し指で綾音の頬を突く。

「え?」

思わず言葉を止めてしまう綾音を見つめるミランダは一瞬だけ微笑むとその手を放し、アレクセイに向けて発言する。

「でも動き自体は悪くはないし射撃も安定しています。私から一つ言わせてもらおうと……もう少し元の機体特性を理解して上手く利用すれば短い時間でも十分に習得できるとは思われます」

「その考えは概ね同意だな……いやあ、ミラちゃんは良く見てお兄ちゃんは関心関心」

一瞬、聞き間違えかな? と思った綾音は思わずアレクセイを見るとそこには先ほどまであった爽やかそうな表情がそこには一切なく、思ってはいけないのだが「気持ち悪い」という印象が浮かんでしまう。

対称にミランダは先ほどの笑みが一切ない鋭い目つきでアレクセイに言う。

「……兄様、ミラちゃんはお止めください。今の私は欧州連合軍の衛士、ミランダ・アルセイフ少尉です。もしそれ以上何を言うのであれば……わかります、よね?」

ドスを聞かせた声で睨むミランダにアレクセイは微笑を浮かべて「あは、ごめんね」と言っているが額に滴る汗を綾音は見ても見ぬ振りをする。事をこれ以上ややこしくしても話が進まないと感じ取ったからだ。

「こほん、とりあえずミランダも言っていたけど、基本の動作は問題な

い感じだね。前にミランダと演習した時の映像と動きが被る所がある。

でもそれが今の鈴風少尉の動きを阻害しているとも見えたね」

微笑の表情を崩さずにアレクセイが指摘し、ミランダも頷いていた。

その指摘に綾音は率直に自分が思っている感想を二人に伝える。

「確かに不知火を操縦している時と同じような感覚で動かしているのは確かです。ですが……うちの整備班が調整してくれたおかげで今の瑞雲も不知火と同じような感覚で動かしているとは思っています。整備は100%に近い仕事をしてはいますが……」

自分の腕の事を言われるのはまだいいが、自分の為に戦術機に改良を施してくれたライノ中隊の整備員たちの事に文句を言われるのは、我慢できずに言葉にしてしまうと、その言葉を聞いてアレクセイはすぐに訂正した。

「あ、すまないね。そういう意味で言ったわけじゃないよ。その点に言えば逆、むしろこんな短期間で米国のスーパーホーネットを改良して実機のトライアルまで漕ぎ付けるなんて、流石に驚いたよ。」

日本帝国は今も自国にハイヴ甲21号を抱えているという事もあり、整備班の練度が高いのは想像していたが、初めてのトライアルを終えた後の次の日にはトラブルを解決しているのは遠目で見ても関心したほどだよ」

「え、ええ。そのありがとうございます」

「兄様、少々興奮気味で話しているから綾音が引き気味になっています。興味があるのは十分に伝わったと思うのでその辺でちゃんとした説明をしてください」

ミランダがジト目でアレクセイを抑えると、から笑いで誤魔化した後でゴホンと咳を一つ。綾音とミランダの視線が集中するのを感じてアレクセイは言う。

「まあ、色々あって昨日、ここに居るミランダから鈴風少尉が新しい戦術機の事で困っていると相談を受けてね。」

まったく、これでも私は欧州連合軍、アフリカ派遣部隊の一翼を預

かる身として忙しいのだけど……愛しい妹の頼みであれば、今日行われる作戦会議をサボタージユしても問題はないさ！

なので、今日は鈴風少尉が気になっていいる事をどどん訊いてみて次のトライアルで生かせるように有意義な時間になれれば、私やミラ、ミランダも嬉しいと思うよ」

その話を聞いた綾音の視線がミランダに向けられる。その視線に気づいてミランダの照れたようにそっぽを向くと。

「お……兄様、それは言わない約束だったでしょ！　しかも作戦会議のサボタージユは私も聞いてないんですけど……またディアソル中尉に押し付けたんでしようね」

「平気だよ。ディアソル中尉には今度ご飯でもご馳走するつもりだから、それに中尉もいつかは部隊を引き連れるようになるんだから、今のうちに作戦会議の場に慣れておくのも重要さ——冗談もこの辺で、そろそろ本題にはいろうか？」

声色が変わり、アレクセイがミーティングルームのモニターを起動させると画面には綾音が許可を得て持ってきた不知火と瑞雲の機体スペックが表示されていた。

それを見てミランダが口を開く。

「肩の重心比率、脚部兵装ブロックの違いは大きいけど、動いている映像を見比べるとよくもまあ、不知火と同じような動きできるわね。跳躍ユニットの不備とかはあるの？」

「跳躍ユニットなら全然、むしろ燃費は今の方がいいぐらいに調子はいいと思う」

そう答える綾音の言葉にアレクセイが顎に手を当てて考える。数秒後、何かを思いついたようで視線をミランダに向けると何かを察したように近づいていくと耳を向ける。

コソコソとアレクセイがミランダに何かを告げている。綾音は自分にこれから何が降りかかろうとしているのか、内心身構えてしまふ。

そして話が済んだのか、ミランダが綾音の前に来て一言。

「二つ、貴女にやってほしい事があるのだけど、いい？」

一瞬、どうしようか？ と迷いが生むものの、限りある時間を作った二人の気持ちが無下に断る事は出来ない綾音は頷く。

「私にできる事があるのなら、大丈夫。こちらこそお願いします」

深々と頭を下げる綾音の姿にミランダはアレクセイに視線を向けると「本当に大丈夫なんですよね？」と思わず丁寧口調で問うと。

「そうだね。ちゃんと上に許可は取った訳じゃないけど、どうにかするよ。僕がガルム中隊の中隊長として責任は取るし、何より愛する妹の久しぶりに出来た友達の悩みを解決できるなら、お兄ちゃん、頑張っちゃおうぞ」

ニコツとするアレクセイ、こうなった兄を止める事は出来ないし、こうなった兄がどうしようもなく馬鹿で好きなミランダは内心ため息をつく。

ミランダが褒めるとすぐに調子に乗るのを知っているので、感情は抑えて表情に呆れ顔を浮かべると言った。

「そこは笑顔でいう場面ではないんだけどなあ……まあ、いいですけど。鈴風少尉、場所を変えるからついて来てもらえらる？」

頭を上げる綾音にそっと手を差し伸べるミランダの表情はどこか恥ずかしげでもあり、嬉しそうな表情を浮かべていたのが綾音の心の中で印象に残るのであった。

そうして、三人はミーティングルームを出ると欧州連合軍の施設の奥へと進んでいくのであった。

心の隙間を風ぐ、その風は ⑥

薄暗い部屋の中、とある準備を終えた綾音たちが大きな扉のついた部屋の中へ進んでいく。そこには幾つもの照明の元に戦術機シミュレータが並んでいた。

フランス陸軍の強化装備に身を包むアルセイフ兄妹、そして同じ強化装備を着た綾音の姿がそこにあった。

「私まで着てしまつて大丈夫なんですか？ 一応、貴重品ですよね？」

心配そうに綾音が尋ねる。衛士の育成や鍛練など、その殆どに多額の資金が投じられており、強化装備も高額な装備の一つであった。その問いにアレクセイが微笑を浮かべて応える。

「あはは、気にしないでおくれ。それも僕のコレクションの一つだからね！」

「!?!……そ、それってどういう意味なんですか？」

その問題発言に絶句しそうになる綾音の表情を見て、堪らずミランダがツッコミを入れる。その顔は呆れたを通り越して、すでにアレクセイには視線すら向けていない。

「本当にこういう所はアルセイフ家の汚点ですわね。お兄様……鈴風少尉、流石にコレクションというのは兄の悪い冗談なので本気と捉えないでください。」

この手の冗談にいちいち付き合っているのは時間が無駄なので……兄様、私にこれ以上言わせないでくださいね」

最後の一言に色んな意味を込めてギロツと睨むミランダを見て、アレクセイは笑みを崩さずに頷く。

「はっはっ、了解だよ。マイシスター」

そこで閑話休題、ここに綾音を連れてきた理由をアルセイフ兄妹が説明する。その話を聞いた綾音は更に目を丸くなる結果になった。

「貴女がああ瑞雲を上手くコントロール出来ないって事は最近の戦術機に装備されつつあるスラストターなどの噴射機構の所為ね。それに今まで同じ機体に乗って続いでいぶ癖がついた貴女の不知火と比べたら、そのバランスが一つ崩れただけで予想以上に感覚に狂いが出

たつて事ね」

ミランダの言う通り、一部の戦術機に広まりつつあるトレンドの一つに肩部装甲部にスラスターを配置する方向性、そして自分が乗る事になったスーパーホーネットについては病室にいる時から資料に目にしてきたが正直、そこまで大差ないと高を括っていたのだが、実際には機体操作が覚束なくなり、跳躍ユニットの機動操作にも乱れを生じてしまった。

その所為で綾音は余計にスラスターの存在に頼らずにこれまでの不知火と同じように瑞雲を乗りこなそうとしてしまっていたのだ。た。

だが、それがここまで自分の足を引っ張ることになるとは綾音自身も思っていないかった。

これまで何度も死地を掻い潜ってきた自分の腕と感覚を過信した事、そしてその事を認めようとしなかった自分のプライドが無意識に邪魔していた。

「うん、貴女の気持ちはよく分かるわ。私も昔から乗ってたF5G（トーンード）から今のラファールに乗り換える際にもっと悲惨だったもの。」

急に第一世代機から第三世代機に乗り換えろつて上から命じられた時は言葉が出なかつたし、アフリカ戦線に行けと命じられて、機体のデータ取ってこいとか……はあ、軍隊だから仕方のない事だけだね」

愚痴るミランダを横にアレクセイが真面目な表情で言う。

「僕らの所で扱っているラファールは肩部にスラスターが装備されているし、欧州機には珍しく長刀を常備している機体だ。それに乗る僕らが直でアドバイスすれば、何かしらの光明が見えるかもしれない。」

それに僕が見るところ、鈴風少尉の操縦技術は相当レベルが高いよ。それは色目なしの評価、僕らの部隊の皆もそれは認めている。特にミランダはね」

敢えて付け加えて言わなくてもいい事をいうアレクセイにミラ

ンダが噛みつかうとするも、話が脱線すると思い、グツと自分の気持ち堪えた。

その様子を窺いつつ、アレクセイは話を続ける。

「ここに来て、鈴風少尉の戦闘データをライノ中隊の佐山大尉から見せてもらったけど、突撃前衛で向かう君の動きには迷いはない。突撃級の動きを回避しつつも、すれ違いに長刀を脚に一撃入れながら進むなんて普通の衛士には到底むりな芸当だ。

そして部隊内での損失率が少ないのは君がBETAの目を引いて、他の部隊員が戦いやすくしている事がよくわかったよ。鈴風少尉、君は一瞬の隙も許されぬポジションに居ながらも他人を気遣えるほどの腕があるということさ」

「お、兄様が久しぶりに真面目な事を言っている気がするわ」

口からボヤキの声漏れるミランダは吐息を吐き出すとシミュレータを指さして綾音に言う。

「と、いうことで鈴風少尉。ここまで言われて、用意されて何も知らない訳にはいかないわよね？ てか強化装備着てる状況で聞くまでもないか」

その言葉に綾音は視界を上げる。その瞳はもう迷いの色は浮かんでいない。

その言葉に綾音は気持ちを込める。その声にもう迷いの音は混ざっていない。

その言葉に綾音は自分の意志を込める。その思いに自分の迷いをうち絶つように。

「今日は私が満足できるまで終われないので、二人とも覚悟してくださいね」

瞳に宿った綾音の意志にアレクセイとミランダもその言葉を受け止めて頷いた。

シミュレータであったが初めて他国の第三世代機を操る事になった綾音だったが、最初の数分は機体の挙動などを確かめるように動かしていた。

手本を見せると言って、アレクセイとミランダが一对一での決闘を見ることになり、前にミランダとの演習の際に見た動きとは違い、動作の間にある隙が短く、その動きの流れが出来ていることに綾音は気づく。

「この前の鈴風少尉との演習でミランダの闘争心に火が付いたようですね。何度も訓練に付き合わされたんだよ。今……では機体制御にキレを増して、前よりも鋭い動きを出せるようになったんだよ。これは部隊長としても兄としても鼻が高くなっちゃうよな！」

そう告げながらミランダの近接戦をいなすアレクセイが操るのは同じ欧州連合軍が開発した第三世代機のタイフーンという戦術機であった。

どうもガラム中隊のリーダー格のメンバーにはフランス軍のラファールではなく、タイフーンが敢えて宛がわれているらしい。

欧州連合も一枚岩ではない事に気付くも今は余計な言葉を挟まず、演習での戦闘機動を行う二人の動きに注視した。

ミランダの実戦方式の演習でも肩部スラストによって攻撃を回避していた場面もあったが、跳躍ユニットや主脚での足さばき以外での強制回避運動を入れられる強みを二人の動きを改めて知る。

出力自体は跳躍ユニットに及ばないが、左右への急な慣性を入れて、更に跳躍ユニットと足さばきなどを回避運動に入り混ぜる事で動きの流れを止めずにいける。

自分がこれまで体験してこなかった他国の戦術機の動き、見ているだけでも身体が震えてくる。心の底からうずうずしてくるのを、綾音は心の中で抑え込んで自分ならこう動きたいというイメージを作っていた。

「ふう、兄様、そろそろ我慢出来ないみたいらしいですわ」

「ああ、そうみたいだね。どうやら僕らは眠れるサムライを呼び起こしてしまったのかもしれないね」

アルセイフ兄妹の視線の先、そこには綾音が乗るラファールが歩いてくる。すでに手腕から突撃砲はずれ落ちて肩部ブレードマウント

よりラファール専用の長刀であるフォルケイドソードを装備する。

「まずは私からお相手してあげるわ。同じラファールで負けたらフランス軍としての名折れですからね！」

「ええ、じゃあ………遠慮なく、やらせてもらうからっ!!」

お互いの跳躍ユニットが轟音と共に速度を上げる。ラファール同士の近接戦闘が始まった。

最初の3戦ほどはミランダが勝利していたが、4戦後からは徐々にラファールの動きに慣れてきた綾音に押されつつあった。

その間、近接戦闘だけではなく、突撃砲も交えた戦闘も行っていたがそれでも綾音の方が1枚上手であった。

アルセイフ兄妹のアドバイスや綾音自身の感覚が研ぎ澄まされており、肩部スラスターの扱い方すら習得し始めていた。どうも瑞雲よりもラファールの方が綾音の身体には馴染むらしい。

何度目かの戦闘訓練、突撃砲の弾幕を華麗に裂けてくる綾音機にミランダも手を抜かる事なく、迎撃を行う。戦場は荒野マップであり、以前に演習を行った場所に似ていた為に、また負けるのはミランダにとっても屈辱感が拭えずに操縦桿を握るミランダの手にも力が入る。

「練習の為とはいえ、私だって意地があるっ！負けて、たまるかっ!!」
綾音が長刀を降りかかる素振りが見え、すかさず後退するミランダだったが、その動きを捉えていた綾音はそのままの体制で機体を加速させると長刀の間合いにミランダ機を捕捉する。

ミランダも間合いから抜け出せない判断するとすかさず左腕で防御を行う。

ラファールやタイフーンなどの欧州連合軍の第三世代戦術機には各所にスーパーカーボン製のブレードベーンが装備されており、刺突攻撃やBETAに取りつかれた際に機体を動かすだけで迎撃出来る攻守一体の装備兵装を備えている。

防御した左腕ごとブレードベーンが砕け散る。だが、ミランダも臆せず左肩部スラスターと跳躍ユニットで体制を右へ大きく崩すと、右手にした突撃砲を撃ちこむ。それは胸部ブロックを確実に捉えて

おり、この戦闘はミランダが勝利する結果となった。

その様子を見ていたアレクセイと同じように外部から見ている者たちから通信が入る。

「うん？ 誰だ？——」

機体ステータス上部にウィンドウが開くと、そこには見知ったガラム中隊のメンバーの姿が映し出されていた。どうやら作戦会議が終わって、報告のためにアレクセイを探していたらしい。

「中隊長、探しましたよ……急に今日の会議は任せたとか。適当な理由付けて上層部を誤魔化したですけど、もうこれっきりにしてくださいね。俺、あんまりポーカーフェイス上手くないんで」

「てか、隊長。何だか面白い事してるじゃないかよ！ こんな熱い決闘見てたら俺も一戦したくなるわ」

次々と画面に割り込んでくるガラム中隊のメンバーにアレクセイは苦笑を浮かべて、ここに至る経緯を説明する。まさか他国の衛士を国の機密の塊である戦術機のシミュレータに乗せているという事に流石のガラム中隊のメンバーも最初は目を丸くしていたが、彼らも様々な事情を抱えてアフリカ戦線に派遣されている経緯があった。

その話している背後で綾音とミランダが今の戦闘での反省点を話し合っていたのが終わるとアレクセイに声を掛ける。ウィンドウにミランダが入り込むと、アレクセイは二人に「一度、休憩を入れよう」と提案すると、すでに一時間近く時間が経っており、連戦もしていたために綾音もミランダは頷いて了承する。

最後にシミュレータを降りた綾音を待っていたのはアレクセイ、ミランダを含むガラム中隊のメンバー達であった。知らない面子ばかりに綾音は委縮しそうになるが、先ほどから熱い試合をしていた為に気分的には高揚していたことも助けになり、綾音が一礼して自分から自己紹介を行う。

「今日は急な来訪で皆さまにご迷惑をお掛けしました。私は日本帝国軍・中東派遣部隊、第604戦術機中隊、ライノ中隊に所属している鈴風・綾音と申します。あの……よろしく願います」

最後の方は気が抜けて素が出てしまった。お辞儀と共に流れる黒髪から除く人形みたいに大きな瞳はやや下を見るように俯く。

ガラム中隊のメンバー達はアレクセイに声を掛ける前にシミュレータールームのモニターに映し出される演習映像を見ていたので、まさか長刀をぶん回して、見慣れない機動をするラファールの衛士がこんなに姿だとは思ってなかったのであった。

平均身長が高いガラム中隊の面々、その中で小柄で身長が160cmほどの綾音は並ぶと頭二つ分ほど背が高いので威圧感が凄い。ガサツな男性陣にミランダは溜息を吐きながら綾音と合間に入るという。

「あのね、貴方たち。もう少し距離感みたいな物を考えてお行儀よくできないの。少しは欧州連合軍の衛士として……普通に考えて女性に対して失礼じゃない？」

自分よりも更に背の小さいミランダであるが、その物言いは堂々としている。もう何年も付き合っている仲間同士なのだろうか、ガラム中隊のメンバーも素直に頷いている。

「おっと、こりやあすまん。いつも通り、そのアルセイフ少尉やうちの女連中と一緒にしちまったぜ」

「悪かったわね。遠回しに可愛げが無くて！ たく、男ってすぐこれだから……鈴風少尉。でいいんだよね？ うちらも貴女みたいな日本人と話すのは初めてだから、上手く発音できているか分からないけど、『これからもよろしくね』鈴風少尉」

柔和な笑みを浮かべて手を差し伸べるガラム中隊のメンバーに綾音も手を握り返し悪手を交わす。

一通りの挨拶を交わすと、今度はガラム中隊のメンバーを含めた小隊単位、そして敵にBETAを登場させて中隊単位の戦闘機動、そして各メンバーとの対一の決闘など、昼食を挟みながら数時間にも及ぶ濃厚な訓練時間を過ごしたのであった。

P? 18時過ぎ、シミュレータールームに備え付けられているベンチで肩を並べて眠る綾音とミランダが疲れて眠りこけている中、一人P

Cに本日の訓練データを纏めているアレクセイがコーヒーを流し込みながら、データ作業を終了させる。

そこには綾音やミランダだけではなく、各ガラム中隊メンバーの戦闘データもある程度の数値化して解析してあった。とある人物からこちらの施設と人員を貸してくれという相談をアレクセイはデータを取らせて欲しいという取引で承諾したのだが、今後の部隊方針や各メンバーのやる気などに貢献した。

なおかつ、アレクセイも久しぶりに剣を交えて本気で相対したことで自分の感覚がより研ぎ澄まされていった気もした。

西ドイツ戦線が崩壊して、BETAによってフランスが蹂躪されるまでの間、ミランダと共に新人衛士として何とか生き抜いてきた。

今の自分たちがここに居るのはあの戦場で生き抜いてきた証でもある。

そんな過去の記憶に思いを更けながら、温くなったコーヒーを飲み干すと、シミュレータータールの扉が開くと数人の姿が視界に映る。

「すいませんね。迎えに来るのが遅れました、ご苦労様でした。それにガラム中隊の皆さんにもお世話になったようで」

そう頭を下げていう男は今回の演習の件を依頼してきた男、ライノ中隊の中隊長の佐山であった。

「いえ、こちらとしてもいい経験をさせて貰いましたよ。お礼を言うのは僕もですよ。佐山大尉。とそちらの女性はいつも鈴風少尉と一緒にいる方ですね？」

挨拶しつつ敬礼を行うアレクセイにもう一人の人物も敬礼で返すと自分の身分を口にする。

「私はライノ中隊の浅倉・千里少尉であります。今日は……綾音ちゃんがお世話になったようで、それにいい方向に進んだみたいで安心しました」

ニコツと笑う千里は綾音とはまた違う性格の女性だというのがその仕草で分かるし、こちらの状況を綾音の寝顔で判断できる観察眼を持っていて事もアレクセイは判断した。

「浅倉少尉、鈴風少尉とアルセイフ少尉を起こしてくれないか？ い

つまでも強化装備を着ていては電力が切れたら体調を崩してしまうからな」

「それは僕からもお願いしたい。流石にわが妹を着替えさせるのは色んな意味でマズイので助かる。今、こちらからも案内で一人応援を呼ぶから、ちよつと待ってくれるかな」

内線電話でガラム中隊から女性衛士が一人駆けつけると眠る二人を担いでシミュレータールームを出ていく。

最低限の照明が照らす中、お互いの中隊長だけが残るとまず最初にアレクセイが口を開く。

「昨日はビックリしましたよ。まさかミランダと佐山大尉、二人から同じような事をお願いされるなんて」

微笑を浮かべるアレクセイに苦笑を浮かべて佐山が言う。

「偶然とは言え、そちらの妹さんが同じような事を思いつくとは考えてませんでした。それで結果はどうでしたか?」

そこが一番に気になっているとは、と思いながらもアレクセイは無駄に詮索せずに先ほど纏めたデータの画面を佐山に見せる。もちろん綾音だけのデータであるが。

そのデータは隅々まで目を通していく佐山は一息入れて、どこか胸を撫でおろしたような表情をする。

「あなたみたいな歴戦の衛士でも心配になる事があるんですね。しかし、もし失敗していたら彼女はもつとスランプに陥ってしまう結果も存在したのですよ? 腕は悪くありませんが……」

助言のつもりで言おうとしたも先に佐山が遮るように言葉を挟む。「単純ですよ。鈴風少尉には決定的に足りないモノがあったんです。しかし、このデータやあの安らかに眠る表情を見たら解決したのかと分かりましたので。」

鈴風少尉には腕は確かにいい。うちの中隊でも一流なんですけど、心に深いトラウマが刻まれて、その時から精神年齢が止まっているんです。その所為もあり、あいつは自分に自信が持てない所があるんです。

単純に言えば小心者なんですよ。ここに来て何とか冷静さを取り

繕っていました。この前、新人衛士を率いて小隊出撃した結果で心の糸が切れてしまったのでしよう。

あいつは人一倍、仲間の死には敏感なものでね」

そう告げる佐山の表情は感情を押し殺した無表情、今のご時世、人の死は隣り合わせに存在する。しかも衛士であれば何人も人の死を経験してきたのだ。

死者への思いに引つ張られて心が壊れていく衛士をもう何人も見てきたアレクセイもその事は承知している。

「取り合えずこれを……今日の演習データのコピーです。鈴風少尉はラファールをこの数時間で使いこなし、機体挙動も習得しました。多分ですが瑞雲という戦術機もこれできつと、使いこなせると思っています。僕らの中隊も今回の件でいい刺激を受けたので、ありがとうございます。ありがとうございました」

「こちらこそ、無理な相談を引き受けてくれて本当に助かった。と言いたい所なんだが、あと一つちよつとした話があるんだが——」

後日、スエズ基地。

瑞雲の最終トライアルを無事に終えて、先ほどライノ中隊の格納庫でささやかながらの打ち上げ会をおこなったと、静まり返る格納庫に整備班長と佐山大尉、そして側近であるライノ2の姿があった。

「あんたがどんなマジックをしたかは知らんが、鈴風のお嬢ちゃんの動きがこの前とは全く違って驚いたぞ。あの分だとすぐに瑞雲を使いこなせるだろうが……限界は近いぞ。瑞雲もいい機体だが、もとより長刀などを振り回す機体じゃないし、間に合わせの改造機だ。今の鈴風の嬢ちゃんじゃすぐに手に余る状態になるぞ」

「その事について話があつて、残つてもらったんだ。ライノ2、あの資料を」

「はい、大尉。これです」

ライノ2が抱えていたファイルには紙束が挟まれており、それを見た整備班長はくたびれた帽子被り直すと。

「そのファイル、それじゃあ本当に計画を行うつもりなんだな。まあ、うちらとしては仕事が増えるがやりがいのある仕事なら任せてくれ。こんな機会、整備人生で訪れないかもしれないからな」

格納庫の隅にある戦術機運搬用の大型トレーラーに視線を向ける整備班長、そこには半壊したライノ7の不知火が乗っており、頭部と胸部、腰の一部のみが積まれている。

修理パーツの関係性でスーパーホーネットを日本機仕様の瑞雲を仕上げたというのに、まだスクラップ同然の残骸が大切に保管されていた。

佐山がファイルの中身をチラツと窺いながら言う。

「先方には話をまた付けてきた。それに設計図もようやく完成したんだ。祖国から遙か彼方に派遣された俺たちが少しぐらい好き勝手に動くのぐらいは大目に見て欲しい所だな。こっちはパーツが少ない中でやりくりしているんだから」

「ははは、違いねえ。それにしても腕がなるってもんよ。うちの若いのに設計士目指していたヤツがいてよかつたぜ」

佐山が見ていたファイルを再度受け取るライノ2、その分厚い中身の紙束のページ目にはこう記載されていた。

——不知火一型丙、改修計画——と。